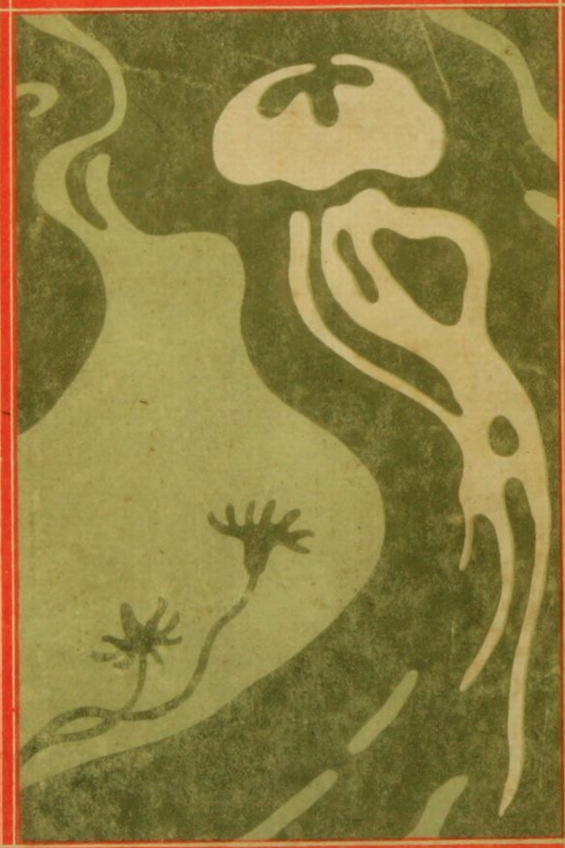
海賊

バイロン 著
水村鷹太郎 譯

海賊

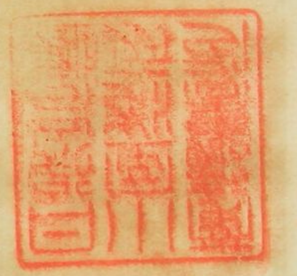
バイロン 著
木村鷹太郎 譯



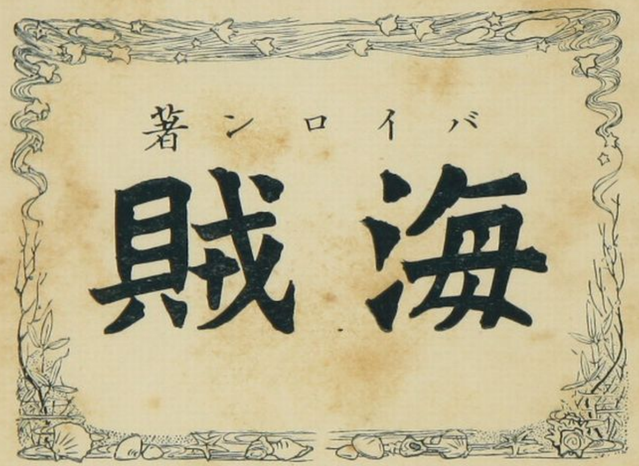
海賊

バイロン著
木村鷹太郎譯

海賊



帝國圖書館藏

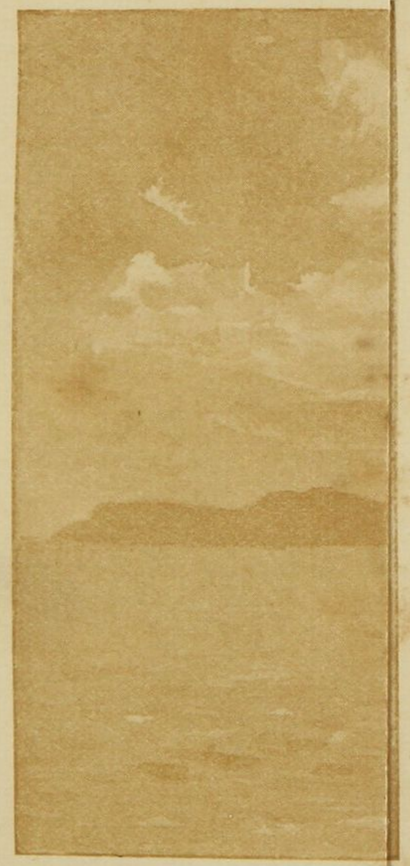


木村鷹太郎譯

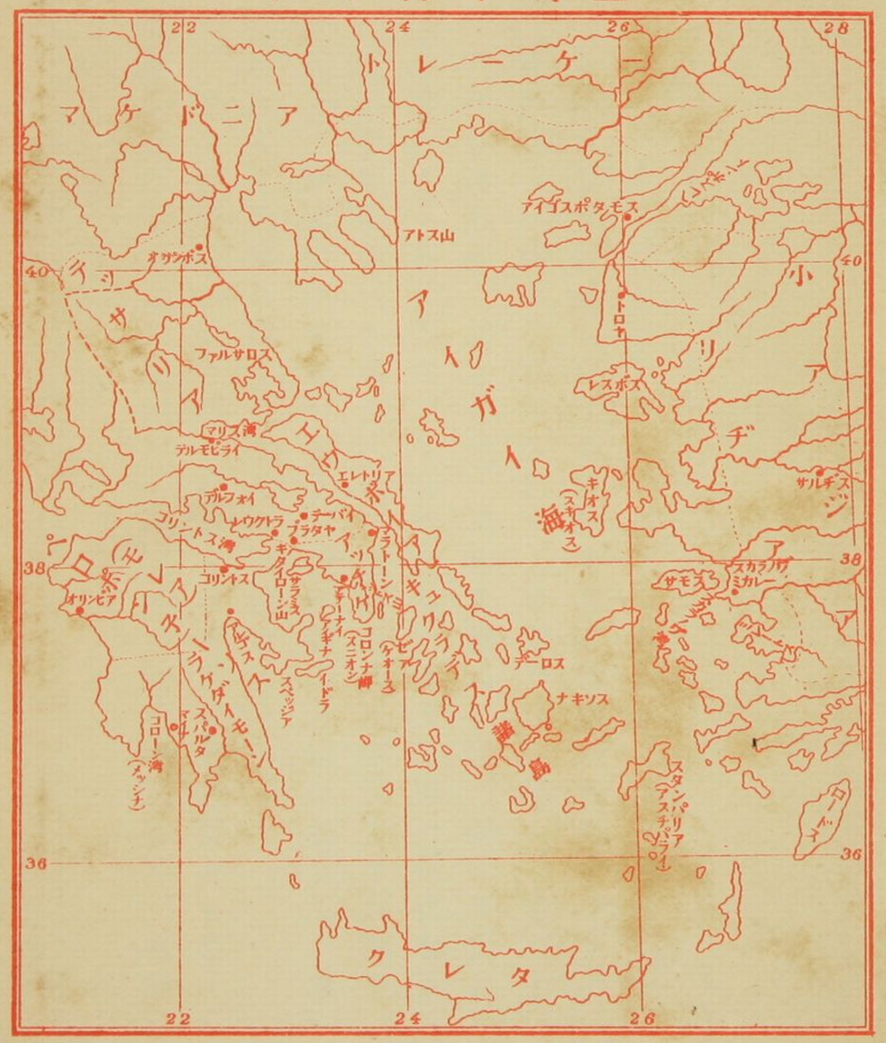
東京 尚友館發行

帝國圖書館藏

Think not I am what I appear;
I've arms, and friends, and vengeance Near.
-Byron, "The Bride of Abydos".



アイガイ海圖


22
24
26
28
40
38
36
トレーケー
マケドニア
アトス山
アイゴスポタモス
ヒンダルダネルス海峡
オリンポス
イリリア
ファルサロス
アガイ海
小アジア
トロヤ
レスボス
マリス海
テルモピライ
エレトリア
アルフォイ
ボイオティア
テーバイ
プラタヤ
コリントス湾
ギタイロン山
コリントス
ペロポネソス
オリンピア
ラコニア
スパルタ
ペロポネソス半島
ケンクレアイ
ナフプリア
ミケーナイ
コロナ湾
(メッシニア)
スペッシア
アテネ
ピレウス
ケオス
ナキソス
キクラデス諸島
キオス
(スキオス)
サルチス
サモス
スカラノヴ
ミカレー
スタンパリア
(アスチパライア)
ロードス
クレタ

序

バイロンの『海賊』、名は海賊と謂ふと雖、吾人の見る所を以つてすれば、實に高尚雄大なる道義の發現となす、其男性の、意志の堅固にして、名譽の念に厚く、古武士の如き趣ある、其女性の、柔和貞婉にして、孌たる天女の美ある、實に男性にも女性にも、雄大優美の感化を及ぼすや大なるべきなり。殊に海賊主人公が男子の貞操を守り、琴瑟相和するが如き、其海賊の名稱に對して、寧ろ吾人は奇異に感ずるまでに高潔なりとす。

實に『海賊』篇の如き詩を讀みて、然る後吾邦當今の群小說家及び文士なるものゝ、無定見、無主義にして、哲學

なく、理想美なき著譯を見るに於ては、吾人は後者に對して厭然唾棄の感なき能はざるなり。ゲーテが、エッケルマンの『バイロンには純潔なる教化的のものありや』との問に答へて『余は汝の言に反す。何となれば、バイロンの剛膽にして雄大なるは、實に教化的傾向を有すればなり。吾人は常に純潔或は道義等を意に介するを要せず。凡そ雄大にして堂々たる所のものは、是れを知ると同時に必ず教化の力あるなり』と言へるは、バイロンが此種の教化力を有せるを明かにするものなり。

バイロン曰く『余は婦女子、俗人等の讀み物を書かんとはせず』と。故に其詩は婦女俗人等の喜び得る所の、小說裨史類とは趣を異にし、或は難解のものあるは當然なり、

且つ詩なり。讀者決して、かの小說或は軟弱無主義の所謂美文なるもの等と、同一視する勿らんことを要す。

余は成らん限り原詩の用語措辭をも保存することを力めたり。然りと雖絕對的に之れを行ふは不能の事に屬す。此に於て、時には意譯の法を用ゐたり。其韻及び律の如きは、何人と雖、他國語に移す能はざることにして、余は只バイロンの此詩の精神の幾分なりとも、之れを邦文に移すを得ば、吾願足れりとなすのみ。昔は飜譯は容易の業なりとせし時あり、これ難解不明の個所は之れを省略糊塗するも咎むる者なかりしを以つてなり、然るに今や飜譯至難の時代となれり、之れ批評家進步し、又た惡意の詮鑿家多き時代となりたればなり。

余や不文、然りと雖、原文に對照するに非ざれば解す可らずと云ふが如き、飜譯の流儀を取らざりしことは、自ら之れを信ずるものなり。

余の此詩を譯するや七五調の體を用ゐんの心なきにしも非ざりしが、之れ或は倦み易き詩體なるを以つて、若かず、散文もてせんにはとなしたり。されども成らん限り口調を善からしめんが爲めに心を用ゐたりと雖、余自ら毫も成功の感なく、甚しき不滿の念に充てり。されども余は不幸にして十分の時間を有せざるものなるを悲しまざるを得ず、讀者幸に諒せよ。又た句讀は文章、意味上の句切りの爲めのものありと雖、又た意味文法に係はらず、たゞ口調の爲め、置きたるものもあり、若し人朗

讀せんとせば、試みに成るべく、句讀點は句切りて讀まことを望む。庶幾くば、口調多少は惡しからざるを得んか。

海賊活動の地理を明かにせんが爲めに、アイガイ海圖を挿入せり、註釋をも併せて參照し、研究の一助たらば幸甚。

歐米に於けるバイロンの研究は、テニソンの出現の爲め、一時衰ろへたりと雖、テニソン沒して、一時蔽壓されたるバイロンの眞價は再びこゝに耀き出だし、其研究は十九世紀の末かけて今や次第に復興して隆盛に向へり。殊に歐洲大陸に在つて、外國文學の研究さるゝは、實にバイロンを以つて最となす。先年余の友人にしてロシア

に至りし者あり。ペテルブルグにては、バイロンの『海賊』を舞臺に上せ居り、彼れは其演劇を觀たりと云へり。其已にロシアにまでも入りて、歡迎され居るを以つてしても、其詩の價値の如何を知るべきなり。

明治卅七年十二月六日

木村鷹太郎

海賊

目次

序

バイロン肖像

挿畫

アイガイ多島海々圖

『海賊』に就いて—

スカンヂナヰアの海賊とバイロン家及びバイロン○地中海の海賊とバイロンの『海賊』○日本の『倭寇』と日振島、瀬戸内海○バイロンの『海賊』○『海賊』とバイロンの女性關係○『海賊』の景色、自然と人○『海賊』の動機○古武士の如き『海賊』○妻メドラの貞婉、男子の貞操○石榴の花のグルナレー

捧呈文……一

第一齣　海賊島……一一

海賊歌○海賊島の景況○偵察の歸來○海賊首領コンラード○其技量と其心情○妻メドラ○纏綿たる愛情○海岸丘上の樓閣○遠征の企圖○別離の情○出帆

第二齣　海賊の襲擊……八一

ザイド太守館の祝宴○ザイドの人物○變裝の「デルギッシュ」○早變り○太守の宮殿修羅場となる○海賊兵の勝利○女の泣聲○運命一變○コンラード捕虜となる○ザイドの愛妾グルナレー竊かに獄中にコンラードを見舞ふ○グルナレー、海賊に戀慕す

第三齣　海賊の末路……一四七

アイガイ多島海の夕景及びアテーナイの夜景○メドラの物思○グルナレー海賊の放釋を願ひてザイドと爭ふ○獄中の暴風雷電○グルナレー獄中に來りて海賊を口說き共に出奔せんとす○グルナレー、夫を殺す○出奔○グルナレーに對するコンラードの胸中○海賊島に歸着す○メドラの死○コンラードの失踪

註釋

表紙意匠及ひ挿畫　美術學校教授　和田英作氏

バイロン肖像　フィリップス（一千八百十四年）

『海賊』に就いて

木村鷹太郎

世界の海賊運動の大なるものに三あり。一はスカンヂナヰヤ人、二は地中海の海賊、三は日本の倭寇之れなり。

スカンヂナヰヤの海賊とバイロン家及びバイロン

スカンヂナヰア人はスエーデン、ノルエー、及びダンマルクに住せる古代人種の稱にして、其東部、スエーデンに住せるものは東向して東ヨーロッパの廣原スラヴの地に入りてロシアの創建者となり、其西部、ノルエー及び

ダンマルク等のものは茲に海賊となりてヨーロッパの海岸を抄掠す、之れを北人と稱し、又た「デーン」人と云ひ、トール及びオヂン等の剛壯堅忍殘酷を精神とせる神を信奉せり。初めはたゞ其安逸を好まざる氣象に由り、劍力を以つて權利となし、他の所得を奪ひ以つて自己の快樂を得んとするを目的としたりと雖、次第に政治的精神を生じ、定住の思想を起こし、諸國に植民し、ヨーロッパ北部の沿岸及び諸島を抄掠し、之れに植民し、終には其勢力地中海にまで及びたり。而して其最も大なる運動は英國の侵略にして、一千十七年北人カニュート英國の王となれり。之れスカンヂナヴィア人の最も盛大なりし時にして、ダンマルク、スヱーデン、ノルヱー及びイングランドは

一王の下に統一されたり。

フランス亦數々北人の侵す所となり、九百一年北人ロルフ、セーヌ河口に出現す。フランス恐れて土地を與へて媾和し、ロルフをノルマンヂー侯となす。後ノルマンヂー侯ウイリアムの時に至り英國を侵略して王となり、英王はノルマンヂーを兼有せり、之れ紀元一千六十六年なり。之れ北人海賊の運動の大なるものにして、彼等が、勇敢不屈の氣象を以つて、ヨーロッパの天地に生氣あらしめ、又た其社會組織等に影響を與へたるや決して少々に非ざりしなり。

『海賊』の作者バイロンは、此海賊の後裔なり。其祖先は元と Burun（バールン族）と稱す。後ノルマンヂーに定住し

たるが、ウイリアム、ゼ、コンカラーと共に英國に攻め入り、後ヘンリー二世の時ロバート、デ、バイロンの時に至りて初めてByron（バイロン）の綴字を用ゆ貴族なり。

詩人バイロンの大伯父、祖父、父及び母等、高尚なる性質あり、野蠻なるあり、狂人の如きあり、勇壯なるものあり、是等種々善惡高下の性質は相混合して詩人バイロンに遺傳し來れり。バイロン一千七百八十八年一月二十二日ロンドンに生る。十七歳の時ケンブリッヂ大學に入り、後一千八百九年より二個年間歐洲諸國より、トルコ小亞細亞等を旅行せり。之れ『チャイルド、ハロルド』的の旅行にして、其結果として、有名なる『チャイルド、ハロルド旅行記』成る。後結婚し、他の婦人關係生じ、離婚し、英

國社會の攻撃を受け、外國に移住し、スキッツル、ゼネチア、ラゼンナ、ピサ、ゼノア等に居れり。其ゼネチアに在るの時ギッチョリ伯爵夫人と相織り、夫人離緣せられ、バイロン、夫人と同居し交情極めて親密、バイロンの品行大に進みたり。

當時イタリアはオ、ストリアの壓制より獨立せんとせり、バイロン種々の方法を以つて之れに援助す。又たグレシアはトルコより獨立せんとして戰爭を起こしたり。グレシアはバイロンの念々忘るゝ能はざる所。直ちに赴きて之を助け、一方の指令長官となり、大に爲す所あらんとせしに、一千八百二十四年四月十九日陣中に死す。年三十六。實に世界の詩人中最も偉大なるものなり。

其詩の有名なるものは『チャイルド、ハロルド旅行記』、『ジャワー』、『アビドスの新婦』、『海賊』、『ラヽ』、『コリンス攻城』、『パリシーナ』、『シロンの囚人』、『マゼッパ』、『マンフレッド』、『サルダナパルス』、『カイン』、『ドン、ファン』等皆勇敢、偉大、壯烈、悲慘、沈痛、艶麗ならざるなし。

地中海の海賊とバイロンの『海賊』

十二世紀の始の頃より十九世紀の初めの頃に至るの間アルゼリアの盜賊等跋扈して、大砲の威力を借りて掠奪を事とするや、全ヨーロッパの諸艦隊中、海賊隊は最も有力なるものにして、遭遇する者に對しては、盡く自己の定めたる條件を命令し來り、何人も之れに抵抗すること

能はずして、たゞ現今の各國政府の強大なる常備海軍創建さるゝに及びて、漸く海賊の勢力を滅ぼすを得たり。其彼等の盛なるに當つてや、一切地中海に於て商業に從事せるものは、皆な賦課金を海賊に納め、以つて漸く其難を遁れたり。古代に在つてはヱネチア、ゼノア、ピサ等、近代に在つては、イギリス、フランス、オランダ、ダンマルク、スエーデン及びアメリカ等の諸政府は、正規の徵稅を拂ひ、或は高價の品物を贈賄して、以つて辛うして其の安全を購ひたり。若し海賊に抵抗する者あらんには、其罪非常のものにして、苟も獨立政策を執りしものゝ其果ては、アルゼリアの牢獄に繫がれたる數千の耶蘇教徒實に之を證明せり。此くて各國相鬩ぎ、聯合し

て其力を共同の敵に用ゆる能はざりし間は、彼等は、此くの如きの屈辱を忍ばざるを得ざりしなり。海賊のイスパニアに侵寇する間は、フランスの政策を己れに適合せしめたり。オランダが他國の嫉妬にも拘はらず、アルゼリアの海賊は必要なりとしたる間は、各國其危害を撲滅するの機會を有せざりき。然るに漸くナポレオンの大戰爭終り、一千八百十八年列國エース、ラ、シャペルに會合して、耶蘇教國の懲罰を加へんことを議決せり。然りと雖フランスが領土擴大と、文明普及の精神を連結する其時までは、此議決は、殆ど効果なかりしなり。

此アルゼリアの海賊は、地中海の海賊の最も大なるものにして此他諸所に海賊あり。而してバイロンの『海賊』は、

其根據地となし、又活動せるはグレシア多島海なるが如しと雖、其生國は果して何れなるかは、毫も知るべきなし。其イスパニアは數々海賊の侵す所なると、又バイロンの『海賊』中、參謀幕僚の、或はファン、或はゴンサルヲ、或はアンセルモ、或はペドロ等、イスパニアの稱呼なるに由つて考ふる時は、少くとも彼等はイスパニア人なるが如し。然りと雖もコンラードはバイロン之れ英國流のConradと綴れるに由り、確實にイスパニア人なりと云ふことを得ざるなり。されどもグレシア人なりとの考證もあらずと雖、其トルコ政府に反抗せるに由つて見る時は、或はグレシア人なるが如きの觀も之れなきに非ず(當時グレシアはトルコに征服壓制され居たり)。然りと雖、

吾人は其國籍は之れを問はず、寧ろグレシアを愛するバイロン彼れ自身の現化と見れば可なりとなす。即ちスカンヂナヰアよりノルマンヂーに入り、ノルマンヂーより英國に征め入りたる海賊の後裔たるバイロンの思想は、こゝに地中海の、最も美麗にして、波は綠に、日光かゞやくグレシアの多島海の海賊として出現したるものたるなり。

日本の倭寇と日振島、瀨戸内海

倭寇は朝鮮、支那、東印度及び南洋等の諸海岸を抄掠したる日本の海賊にして、其勢の盛なる、決してスカンヂナヰアの海賊に劣るものに非ざるなり。其發達は元が

吾國に寇したるより以來にして、吾國沿海不平の徒、遠大の志を發し、內に向つて小不平を唱へ、小競爭を爲さんより外に對つて大に雄飛し、以て其欲望を逞うするに若かずとなし、慓悍無雙の勇者等、有力なる大將に導かれて、日本海、支那海及び南洋等に橫行、跳梁したりしなり。かのアジア全土を蹂躙して、遠くヨーロッパまでも征め入りたる强大なる元の如きも、日本の此海賊を如何ともするなく、後元を亡ぼしたる大明國も、亦倭寇を所分するの策を知らず、全然其海岸を蹂躙掠奪するに任せたり。然るに惜いかな、彼等未た政治上の見識を有せず、土地を奪ひ、國を造るの思想なく、たゞ海賊として終りたり。其彼等の勇敢なると、其侵寇したる沿岸の廣袤と、

其規模の大なりしことゝは、毫もスカンヂナヰアの海賊に劣る所なしと雖、たゞ其政治思想の缺損と、國土を奪はんとの志なかりしは、彼れに比して、吾人之れを恨事となす。剩へ豐臣秀吉の如きを以つてして、此海賊運動を禁制したるに至つては、吾人は秀吉の爲めに惜まざるを得ざるなり。若し秀吉にして此倭寇を利用せしならんには、明國を滅ぼして、之れを日本の領土に加ふるは、實に容易の事たりしならんに—吾人たゞ之れを恨む。

余や伊豫宇和島の者、宇和島は(名は島なれども島に非ず)古代の大海賊藤原純友の據りし所の日振島とは一呼の間にあり。宇和島灣口に九島(シマ)ありて、こゝを出づれば、沖つ白波雲井にまがふ其間に、大高島、小高島、戸島、

日振島、沖島等の諸島横はるを見る。今若し、此海を後にして、佐田の岬より瀨戸内海に入りて、神武天皇東征の跡を追はんか、四國及び山陽の諸山は遠く烟波の間に見るべく、室津(周防)附近には、祝島、屋島、平郡島、屋代島等あり。三津ヶ濱(伊豫)附近には奴和島、二神島、陸月島、興居島等あり、安藝伊豫の間の海上には上島、大島、大三島、伯方島、弓削島、因島、來島等あり、多度津、高松(讃岐)附近には小島、粟島、手島、廣島、屋島、小豆島等ありて、淡路島は其最も東方にあり。海碧く、山は綠に白帆其間に來往し、風景の絶佳なる、實に世界無雙と云ふべく、若しグレシアの多島海を詠じたるバイロンにして、日本の瀨戸内海—多島海—の朝日夕日を見たら

んには、彼れや必ず『大和心』となりぬべきなり。

此くてバイロンはスカンヂナヰアの大海賊の後裔たり、其詠じたる『海賊』は地中海系のものにして、日本の古代の海賊等が享有し、バイロンのグレシアに聯想する所の美なる風景に關係を有する余が、バイロンの『海賊』を飜譯するには、感情上、一種連絡の趣味なきにあらざるなり。

若し夫れバイロンの歌ひたる、アイガイ多島海の美を知らんと欲せば、試みに大阪より汽船に乘り、千鳥通ふ須磨、淡路を後にして、播摩灘、多度津沖、今治沖、三津濱沖を過ぎ周防灘を經て、佐田岬より南航して宇和島に至れ—日振島は近くに見えん。純友の昔を想ふも亦妙ならずとせず—或はアイガイ海に似たるものあるべし。

バイロンの『海賊』

『海賊』は一千八百十四年一月二日の出版なり。之れ友人トーマス、ムーアに捧呈せしものなり。其敘景の美、主人公たる海賊の性格の尊大堅固、而も溫和なる、其妻『陰鬱の星』なるメトラの貞淑なる、敵の愛妾にして、海賊に戀慕せし、『黑眼勝ちの若き』グルナレーの天女の如きの艶美、實に眼見る如く、情眞に迫り、人をして興起せしむるものあり、溫和ならしむるものあり、又理想美を想はしむる者ありて、實に儼然たる、感化力ある大文字と云ふべく、殆ど一點非難すべき所あるなし、故に此書出版即日無慮二万三千部を賣り盡くせりと云ふ。又た以つて

此詩の好評を窺ふべきなり。而してバイロンの此詩を書くや、バイロンの言ふ所に由れば僅々十日間なりしと云ふ。(報酬五百二十五磅)余の之れを譯すや、之れに十倍、殆ど百日を要したり。あゝ遲鈍なるかな、余は自ら吾筆を憫笑し、自ら慚愧に堪えず。而して飜譯甚だ拙、自ら其不滿足を感ずる者なり。あゝ吾れ罪をバイロンに獲るや些少に非ず。

『海賊』とバイロンの女性關係

バイロンの日記に曰く『ホッブハウス(友人)は余に語るに、余の海賊コンラードの如きを以つてせり』と。秘かにコンラードに比せられしを喜ぶものなり。然り、コンラード

中にはバイロンの性格及び理想の大部分存在し、或點より云ふ時は、バイロンはコンラードなりと云ふとも不可なきが如し。バイロン、『チャイルド、ハロルド』を出版してより、可愛き『チャイルド、ハロルド』たるバイロンは種々の社會の寵兒となり、殊に婦人社會の愛する所となり、多くの女子に圍繞されたり。實にバイロンは、其詩、光彩華麗なるに止まらず、一世の男子らしき美男子たりしなり。スコット嘗て彼れを謂ひて曰く『我れ詩人に於て當時最上のものを見たり。實にバーンスの眼は假令光輝ありと雖、未だバイロンの容貌の如きものなし。實にバイロンの容貌は夢にも見つべきなり』と、又たバイロンに熱中せる女子の言に曰く『彼れの白き容貌は、實にこれ吾不運

なり』と。フランシス、アン、ケンブルと云へる女子の記す所に由れば、彼女は常にバイロンの書を手にして離さず、宛も『剛鐵もて結べるが如く』、或は之れを讀みて枕底に隱くし置きしことあり、而して此書の彼女に感應したることは『毒藥の如く』感情の暴風を起こして全身を覆へし、終には之れに得堪えずして、『以後斷然此宏大なる著述(Grand Work)を讀むまじと決心し、其有力なる大魔力を脱せんとせり』と。

特にカロライン夫人(後メルボーン侯たる人の妻)の如きは、殆どバイロンに狂戀せりと云ふべし。夫人(バイロンに長ずること三歳)始めバイロンを見る、雜記に記して曰く『狂なり、惡なり、相見ることは危險なり』と。これ夫人、

心中已に戀愛の情起り、自ら之れを禁ぜんとせるなり。然るに此後バイロン、メルボーン侯を訪問せし時、夫人カロライン大に喜び、之れより兩人の交際親密を加へ、『コンラード』たるバイロンは其勇壯なる談話を爲し、又種々の辛苦を語りて夫人の心を喜ばしめ、又は『メドラ』たるカロラインも、心中の秘密を打明けたり。然るに夫人の熱心餘りに甚しかりしより、バイロンの愛情は冷却し、交際を嫌ふに至れり。此に於て夫人心中熱して狂の如く、バイロンの肖像及び髮髮等に向つて、罵詈の言を發し、或は彼れの書狀を燒きなどせり。かゝる情態なりしより夫人はメルボーン侯より離緣されたり。(されども再び調和して歸家したり)夫人此くバイロシを罵ると雖、尙ほ內

心未練殘り思慕の情遣る方なく、此情態を以つて八年を經過せり。（バイロンは外國に在り）然るに一千八百二十四年七月十二日馬車を驅つて外出するや、會々一列の葬儀に逢ふ。其バイロンの遺骸（グレシア獨立戰爭にて死す）を墓に送るものなるを聞き、驚愕と悲哀とは、一時に胸に迫り來りて、暫く其場に氣絶せり。家に歸りて次第に病を重くし、遂に死す。死に當つて穩和なる手書を夫に宛てゝ前非を詫び、バイロンの肖像を其友モーガン夫人に遺物として與へたり。『チャイルド、ハロルド』たり、又た『コンラード』たるバイロンの、女子に對して有せる勢力、及び女子のバイロンに對する情、大抵此くの如し。

『海賊』の景色—自然と人物

バイロン、グレシアを愛す。然るに其過去の歴史の光榮あるに係はらず、バイロンの當時は、全くトルコの滅ぼす所となり、殆ど奴隷の狀態にあり。之れを以つてバイロン常に其獨立を希望し、詩に歌に常に之れを吟詠じ、以つて彼等を感憤せしむる所あらんとし『これグレシアなり、されども活けるグレシアは今は亡し』と云ひ、又た『自由の裔（すえ）なる奴隷よ』（『ジャワー』）と叱し、後年又た『ドン、フアン』中にも

『山はマラトーンに向ひ
マラトーンは海に向ふ。

吾れ暫く此の所に立ちて思念すらく、
グレシアは尙ほ再び自由の國たるを得べしと
吾れペルシア軍の臺上に立ちて、
如何にするとも吾等自ら奴隷に終ると思ふ能はず』（ドン、フアン第二齣）

と、又た『海賊』第三齣の始めに、グレシア多島海の美を叙して附言して曰く『此海賊島も、以前は汝（グレシア）のものなりき、再び汝のものたらんことこそ願はしけれ』と。グレシアの美を念ずる毎に、常に又た其獨立を希望せり。

バイロン夫れ此くグレシアを愛す。『海賊』の活動する景色をグレシア多島海に置きしも亦其自然たるなり。あゝグレシア海岸の夕景何ぞ夫れ美なる—

『モレアの丘に夕づく日
靜かにいざよひ沈む時、又た一としほに美はしく

北の國にて見る如き、おぼろに照らすに非ずして、
活ける光はうら〳〵と、くもることなく輝きつ、
靜まりなげる海の上に、黃なる光線を射放てば、
綠の海面之れに映じて、燦たる金波をたゞよはす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今やアイガイの海は遙かに音も響かずなり、
疲れし胸を元行の戰より眠せつけて
波は再び優しき色に染めなされ、
碧玉及び黃金の、長き列をば陳べひらき、
此くもやさしき大洋の、げにほゝゑめる其内に、
顏を顰めし如きなる、離れ小島の數あまた—其影添えて見する
なり』

と。誰か其『入日』の景色の美を忘れ能ふものあらん。バイロンの心は、實に魔術に縛られて、キュクラデス群島内に

封ぜられしものたるなり。

バイロンのグレシアの景色を寫すや、目、見る如し、海岸の夕景、テーセウス神殿の森の月夜の景等、畫家の筆と雖、恐くは此くまで明瞭に、此くまで美麗に、寫し出すこと能はざるべし。バイロンの筆には魔力あり。

其『綠、色濃き海原の、喜び躍る波の上』に渺々と其を見渡して勇む海賊、海賊の住家たる海岸丘上の望樓、其岩切り開きし道—

『道の左右に羊齒生ひ茂り、野生の花も咲き笑みつ、
白銀なせる泉より、すゞしき風を吹き送り、
花崗石の水槽より、清き流れは迸り、
玉と碎けて飛ひ散りて、生けるが如く澄みかゞやき』

と云ふが如き、繪としても見まほしきなり。

此くの如き、海は綠に、白浪、金波燦々たり、夕日の其色黃なるあり、紅なるあり、又濃紫の雲たなびけるあり、月夜には種々の建築物、神殿、森等の靜寂なる趣ある、是等自然の景色中に、バイロン、勇壯なる男子、貞淑、艶麗なる美人を描き出だすなり。之れバイロンの描寫術の妙所なり。

人を現はさんとせば、之れに『自然』を加へよ、美は益〻美に、大は益〻大たるべし。自然を現はさんとせば、之れに『人』を加へよ、自然はこゝに意味を帶び來り、兩者相對照して完全の美を爲さん。此の地中海—海の綠、波の金色、暗夜月夜—此内に忿怒の容貌の海賊を描き、天使の如き、美人を描く、眞に之れ大美なり。

『海賊』の動機

『海賊』の主人公コンラードは如何なる人物ぞ。之れ高尚なる思想を有し、純潔なる理想を懷ける人物が、社會より受けたる薄遇に對して憤りたるものなり。凡て善良有爲の資質を有せる人は、又た事に由つては大惡人と變化するものにして、海賊コンラードは正に之れなり。彼れ始めや人の爲めに盡くし、大に世を益せんとの心ありしなり。然るに人性は忘恩背德の者多く善意ある者は、却つて之れを嫉妬し、或は之れに迫害を加ふるなり。耶蘇の如きも此くの如き境遇を實驗して謂うて曰く『噫、汝等禍なるかな、僞善なる學者とパリサイ人よ、汝等預言者

の墓を建て、義人の碑を飾れり。又た云ふ、我等若し祖先の時にあらば預言者の血を流すことに與せざりしをと。然らば汝等預言者を殺し、者の裔なることを自ら證す、汝等祖先の量を充たせ』と。而して無能にして、心術の卑劣なるもの跳梁跋扈するなり。

バイロンの海賊は人性を實驗して失望せり。人間は、しかく恩を知るものに非ず、嫉妬妨害は必ず常に之れを行ふ。故に人性を善視して事を爲す時は、失望伴はざるを得ざるなり、『海賊』始めより罪惡の生活を爲さんとしたるに非ずと雖、彼れ『失望の爲めに世界より捩ぢ曲げられ』しなり。『餘りに若かく裏切られ、餘りに長く欺かれ』『小虫の如く踏み付けられ、蛇蝎の如く復讎され』爲めに其優

しき心情は、遂に冷淡となり、岩となり、人性を惡視し、人間全體を嫌ふに至り、或人より受けし損害は、遂に之れを人類全體に復讎せんとするに至り、『吾船』『吾劍』—之れを以つて其哲理の基礎となし、『神』に對し、『人間』に對して戰爭を開始せるなり。愛する者はたゞ其『妻』一人。而して人、彼れを侮る能はず

『虫は人能く之れを蹴れども、渦卷く蛇に向つては眠れる毒を覺ますの前に人は躊躇す。

前者は生きて尙能く輾轉し得れども、其打擊に復讎(むくひ)得ず。

後者は死す—死すと雖其敵を活かして殘さず』

とは彼れの形容なり—『死すと雖其敵を活かして殘さず、尙ほ其毒齒を咬み込まん』。海賊の全精神は、『復讎』にあるなり。

古武士の如き海賊

强固なる意志を有し、尊大なる自信を有し、而も恐るべき思想の力を有せるコンラード、彼れの海賊を行ふや、一種德義上の憤怒なり。普通の海賊が財寶貨物を貪り、婦女子を辱かしめ、榮燿を事として快とするの比に非ず。彼れ肉體の快樂を卑しみ、殆ど克己禁欲の仙人の如し。彼れの怨みは男子にあり、女子は之れを害せず。

其傲慢自尊、名譽の感の高きや、宛然日本古武士の趣を有せるなり。其敵(名はザイド)の策源地を襲ひて破れ、捕へられて獄中に繫がるゝや、敵の愛妾グルナレーの戀愛する所となる。グルナレー其夫を殺し、海賊を救ひて

脫走せんとするや、海賊現在其身の運命を歎じて曰く

『あゝゲルナレー、ゲルナレー—吾れ今に至るまで此くまて拙なき運命と、此くまて枯落の名譽とを感ぜしことはあらざりき。ザイドは吾が敵、無慈悲の手をもて、吾徒を地上に掃蕩せしも、而も彼れや公明正大。

されば、こそ我れ亦、兵船もてこゝに來り、吾れを擊たんとてせる者を、吾れ亦劍もて擊たんとせり。此くの如きは吾が武器なり、懷劍には非ざるなり。』

と、名は海賊と云ふと雖、實は高尚なる人格巍然たり。實に之れ『男子』なり。『古武士』を見るの心地するなり。バイロンの性格中、亦此くの如きものありしなり。

妻メドラの貞婉、—男子の貞操

海賊コンラード、天と戰ひ、人と戰ひ、世界万人を敵とすと雖、一の柔和なる心情の未だ消え失せざるものあるなり。之れ『愛』なり。變ずることなく、變じたることなく、只だ一人に向つて此情あり、其妻メドラ一人にのみ。此一人に對する『愛』は、世界万人に對する『嫌ひ』となるなり。メドラは柔和貞婉『影ほの暗き陰欝の星』『可愛の美の鳥』、コンラードの不在中は、樓に登りて海を眺め、又た悲哀の歌を歌ひ、たゞ〳〵夫を思へるのみ。妻、夫を思へば、夫亦妻を思ひ、他に如何なる美ありとも、決して之れに心も移さず目も留めず、嚴然一婦主義を守れり。實に之

れ男子貞操の純の純なるものなり。コンラード、千百の罪惡は、よし、之れ有りとも、之れ其等の德義の去りしを示めすものに過ぎざして、此一德―妻の愛―のみは、純潔無垢、如何なる罪惡其物と雖、之れを消すこと能はざるなり。

コンラードの遠征に出でんとするや、其別離の情、(第一齣の終り)あゝ何ぞ悲しきや、メドラが、或は『見棄られにし、美しき。オリンピア』或は『アリアドネー』の事を語れる條の如き、女心の優さしさ、愛らしさ、可憐さ、實に切痛なりと謂ふべく、ジェフレーが此段を批評して『何人の詩に於ても、此別離の情ほど美しきものあるを見ず』と云へるは眞に當れり。

實にコンラードは『花崗石』の岩にして、メドラは其蔭に保護されて咲きゑめる『百合』の花なり。

石榴の花のグルナレー

眞の美人は男子らしき男子を愛す。グルナレー―石榴の花は原語の意味―『黑目勝ちなる若き』グルナレーが、獄中にコンラードを見舞ひしや、天女の如き姿、あゝ美しきかな。海賊の『勇壯なる』愛に感じ、又た其夫たるザイドの冷淡なるを嫌ひ、遂に意を決し。夫を殺して海賊と共に脫走せんとせり。バイロン彼女の心情を云うて曰く

『あゝグルナレー、彼れ(夫ザイド)はおん身の心情のやさしき時には何をか感じ、怒れる時には何をか敢て爲し得

るかを、聊かだにも思はざり』

と。女性の心情の優しき時と、激したる時とは、大なる變化あり。奴隷たりしグルナレー、一旦心決するや、懷劍を手にし『女の腕の確かさ』を見よと、恐るゝことなくザイドを刺せり。あゝこれ『東洋人の胸中にかゞやく火』なり。此激烈なる時のグルナレーを、かのメドラに對比せよ、メドラの陰欝にして内氣なると大なる差あり。メドラは貞婉柔和なりと雖、グルナレーは活潑にして若かやかなり。而して此黒目勝ちなる、若き、天女の如き美人と雖、コンラードの情を動かして己を愛せしむること能はず。殊に妻たるものが夫を殺すに至りては、たとひ、生命の恩人たるに係はらず、コンラードの嫌惡の情を禁ずること能はずして、胸中、メドラと比較するに於ては、益々嫌惡の情を增したり。コンラード、グルナレーを見る——美麗なり。然りと雖、之れ『殺人者』なりとの念は彼女一切の美を消し去れり。

グルナレー、亦内心に顧みて、己が罪行を悔み、再び女性に歸へりて涙に咽び、

『たとひ神は惡むとも、君は必ず免るしまさん、』

と云ひ、又た

『咎めんとせば咎めませ——されども未だ——今は妾を助けてよ。』

と云ふに至つては、コンラードの心も解け、其可憐さ、惡むこと能はず、此時にのみ、たゞ一度、グルナレーを接吻せり——之れ其始めたり終たるものなり。されども、

此無上の若き美も、未だコンラードの愛の情を起こすの力なく、コンラードの遠征不在中に、メドラ死し、コンラード、グルナレーに救はれて歸り來るや、其悲哀は、こゝにグルナレーも何物も念中にあることなく、たゞメドラ一人に向つて集中し、變ることなく、變りしことなかりし愛情を葬りて、コンラードは其活動を終りたり。

此くてメドラは死せり、コンラードは行衛不明となれり。後には若きグルナレーと、其殘徒あり。海賊の參謀幕僚たるファン、及びゴンサルヴは、コンラードと共に遠征に加はりしが生死知る所なし、ペドロ及びアンセルモは島に殘り居りしを以つて無事なり。グルナレーの前途果して如何なりしならん。

今若し一層精密に『海賊』を分析し研究したらんには尙ほ一層の美を發見することを得るや論を要せず、余はたゞこゝに海賊の强固なる意志、傲慢自尊にして、名譽を重んぜる所の、古武士の趣、メドラの貞淑柔和、グルナレーの美と活潑とを喜び、男子及び女子の性格上に及ぼすべき善良なる感化力あるを明かにし、又た景色及び男子、女子の性格言行等の雄大なると美麗なるとは、一種尙美的感化を與ふるの有力なることを信じ、其信ずる所をこゝに此く一言し置くのみ。

海賊

物語

"I Suoi pensieri in lui dormir non ponno."

Tasso *Gerusaremme Liberata,* Canto X.

トーマス　ムーア君に

親愛なるムーアよ、

余は最近の作を君に捧呈す、實にこれ數年間公衆の耐忍と君の寛容とを侵かすものにして、其の不變の公理、

及び疑ふべからざる種々の材能に由つて清められたる名を以つて、余の數頁を飾ることを得る所の、此の最近且つ唯一の機會に由り、自ら自己を利益せんことを感ぜる者なることを自白す。アイルランドは君を以つて其愛國者の最も確實なるものゝ階級に列し、又た君は其評價に於て其國第一流の詩人として獨歩し、ブリテンは之れを反復し、又た之れを承認せり。願くは君、かの始めて相識りし時以來、其交際を始むる以前の數年を、互に相識らで失ひたることを以つて唯一の恨事とせるものに許るすに、一國民よりも、多くの音聲に、卑しといへども眞率なる友情の票數を加ふることを以つてせよ。之れ、少なくとも君に證明するに、余が君の交際より得たる所の

滿足を忘れず、又た君の餘暇、或は傾向が、君に許るすに、餘りに久しく無消息なりしことに對して、之れを君の友人等に償ふことを以つてするに於ては、何時にても其滿足を新にするの好望を棄てざりしことを以つてするものなり。其等諸友人の言ひ傳ふる所に由れば、君は目下東洋を舞臺とせる所の詩を作りつゝありと、余は之れを信ず、而して此舞臺に就いては、實に何人も正當に成し能はざる所にして—君の自國の短所とせる所、其男子等の雄大にして熱烈なる精神、及び其女子等の美と感情とは、必ずや其内に見ることを得ん。コリンスが、自己のアイルランドの牧歌を稱して、東洋的と名づけし時、少くとも、其對比の一部分の如何に眞なるかを悟らざりしなり。

君の想像は、尙ほ一層溫かなる太陽、及び尙ほ一層曇り少き天を創造することを得べく、其美くしきこと、やさしきこと、及び獨創力あることは、君の國民は東洋人種の後裔なりとの主張中の一部にして、此事に關しては、君の表題は既に、君の國の考古學者中の最も熱心なる者よりも、一層明瞭に證明せり。

余はかの何人も流暢なるべしと想像さるゝと雖、何人も愉快ならざる所の問題に關して、こゝに數言を附加することを得べきか——之れ「自我」の問題なり。余は多く書き又た余が今ま思考せるよりも、一層長き沈默を要するまでに、十分以上に出版せり。然りと雖向後數年間、余は『神、人、及び新聞紙欄』等の裁決を試みんの意志な

し。本篇に於ては余は最も困難なるものを試みしに非ずして、吾等の國語に最も善く適合し、善良にして、古代に行はれしも、今は多く用ゐられざる雄風體聯句を試みたり。スペンサーの句節(スタンザ)は、恐くは物語には、餘りに弛緩にして莊重に過ぎん。余は自白す、之れ最も余の心に適へるものなりと雖、現代に在つては、獨りスコット、能く是迄、全く、八綴音詩の、不運なる流暢に打勝つことを得たるのみ。之れ彼れの豐富偉大なる天才の少なからざる勝利にして、無韻詩に在つては、ミルトン、タムソン、及び吾國の戲曲家等は、海濱に輝やく標識(しるし)の火なりと雖、吾等を警戒するに、其の、是等の火は粗荒磽确の岩上に燃ゆるものなることを以つてするなり。雄風體聯句の最

も人望なきは確かに然り。然りと雖、余は所謂輿論なるものに媚びんとするの心より、他の一方に迷ひ行かざりしを以つて、余は此上の辯解を爲すことなく、其を放任し、以つて再び此作詩法を採用せんとす。此作詩法は、依つて以つて、從來余の何物をも刊行せざりし所のものにして、たゞ以前より行はれ、余の現在の一部を爲し、又た余の將來の悔恨たるべき所の數箇の詩の此法に據れるあるのみ。

余の物語及び數多の物語、全體に關して、余は篇中の人物を一層完全に、且つ愛すべきものと爲し、若し能くし得べくんば、余が時に批評されし如く爲すを喜びしなるべく、又た其れ等人物の行爲及び性質が、全く余の個

性的なりしとせば、之れに對して余は少なからざる責任あることを考へたり。夫れ然り、——若し余にして『自己より描き出さん』との陰欝なる虛飾心に陷るとせば、其描きたる所は多分同樣なるべし、之れ、是等は不快なるものなればなり。若し夫れ然らざるに於ては、余を知れる所の人々は、決して欺かるゝことなく、又た余を知らざる所の者を欺かざることに於て、余は利害を感ずること少きなり。余は特に、たゞ余の知人以外、何人にも、此作者は、其想像の作りし所の人物等より優れる者なりと思はれんとの希望を有するものに非ず。然りと雖、余は數多の詩人（其價値ある人なるとは余の許るす所）の眞に名聲の擔保を有し、且つ全く此等主人公の缺點を有す

ることを免るゝも、而かも『ジアオア』に優るか優らざるかの道德を有せる人物を見るに於ては、此場合に在つて、一種異樣の批評の除外の數例あることに就き、聊驚かざるを得ず、又た面白く感ぜざること能はざるなり。而して恐くば——されども否——余は『チャイルド、ハロルド』は甚だ好ましからざる人物なるとを許容せざる可からず。而して、チャイルド、ハロルドと同人たる者に關して、渾名を附することを好む所の者は、如何なる名稱なりとも欲するまゝに彼れに附せざる可からざるなり。

然りと雖若し是れ暫く世人の感ぜる印象を取り去るの價ありとせば、これ余に或用を爲せるものと云ふべく、かの、其讀者及び朋友等の等しく喜悅とせる所たり、凡

ての社會の詩人たり、又た其國民の偶像とせる所の人は、此處に又た其他に、余の記名を許るすならん、

最も眞實なる、
又た愛情ある、
彼れの從順なる僕

バイロン

千八百十四年一月二日

第一詩

"——Nessum maggior dolore,
Che ricordarsi del tempo felice
Nella miseria——"—DANTE.

一

『綠、色濃き海原の
歡び躍る波の上
吾等の思想はてしなく、
吾等の心自由にて、
風吹きすさぶ其限り、
浪は泡立つ其極み、

吾が帝國と打ながめ
吾が住家とぞ望むなる。
げにこれ吾等の版圖にて
支配を限るものもなく、
吾等の旗の采配に
靡かぬものは無かりけり。
吾等の荒き生活は
げに騷がしきものなれど、
勤勞(つとめ)終らば息(やす)みを得、
變る事毎樂しみぬ。
誰か知り得ん此愉快—
汝等如き船に醉ね、

頭なやまず意氣地なき
驕(おごり)の奴(やつこら)等得も知らじ—
氣隨氣樂を事となし、
眠りも心なぐさめず、
快樂(くわいらく)あれど樂しまぬ
無益のともがら得も知らじ—
たゞ膽力を錬り鍛ひ、
はてしも有らぬ大洋(おほうみ)に
其精神は勝ちすさび、
其高まれる感覺に、
熱血强き其脈に、
武者振ひつゝ勇み立つ

者にあらずば誰かまた
吾等の快樂知るを得ん。
戰を好む心より
近づく戰求めつゝ、
人の危ぶむ其事は
却つて之れを喜びつ、
臆病者の避くる事、
熱心以上にもとめつゝ、
弱き者等の氣絶する
事は、たゞよく張りつめし、
胸の底ひに感覺し、
希望は目さめ、精神は

高く飛ぶ者ならなくば、
吾等の快樂誰か知らん。
吾等と共に敵も死す、
死は恐るゝの要あらじ—
寢れるよりも尙ほ更らに
寂けき如く見ゆるなり。
來らば來れ何時にても—
生命の生命吾れ持てり。
放なちてこれを活かすとも
何者これを顧みる—
たゞ紛爭と病のみ。
衰殘の身を戀々と

惜しむ者等は病床に
長の年月病みつゞけ、
呼吸は重く、力なき
頭ふりつゝ死せしめよ。
吾等の床は芝生なり、
やましき熱の床ならず。
喘息ぎ喘息ぎて彼れはしも
其靈魂を失へど、
苦痛一つ—一と跳づみ、
吾等は死苦を遁るなり。
彼れの死骸は壺、又は、
狹き窖をば誇りつゝ、

彼れを嫌ひし者供は
彼れの墓をば飾れども、
吾等死しなば太洋は
蔽の布又た墓となり、
そゝぐ涙は少なきも
みな眞心のものぞかし。
酒宴の時も吾等には、
記憶をかざる杯に
友をまのべるなつかしき
悲しみの意を湛ふなり。
勝ちて獲物を分つとき
記憶は吾等各々の

額に悲しみ表はして
　死せし勇氣の彼等若し
生きてありなば如何ばかり、
　よろこぶならんと叫ぶ時、
危ふかりにし曩の日の
　短かき碑文こゝにあり。

之れぞ暫時、燎火の四周に高くなり響き、
海賊島より聽こゆる歌、
あたりの岩をふるはせつ、
彼等の粗剛き其耳には、やさしき歌と聽ゆなり。

黄金色なす濱邊の沙に、彼方此方に彼等は群れ、
或は勝負し―酒を飲み―談話し―或は劍磨き―
武器を撰びて―各々に其定まれる劍を取り、
何氣もなくて、光りくもらす血をながめ、
あるは短艇を修復なし、舵置き直し櫂取り揃へ、
あるは濱邊にうそふきて、歌ひさまよふ者もあり、
鳥捕へんと係蹄置くあり、
水の滴る網干すあり。
遙かに一點帆影見ゆるや、
冒險に渴したる彼等の眼は、餘念もなくて見つむるあり。
或は數夜の辛苦を繰りかへし、
次に爲すべき冒險は何處なるかを語るもあり。

何處なりともこは彼等、全く關かり得ぬ所、たゞ之れ首領の欲するまにまに、
彼等たゞ、獲物は必ず之れを得べく、其計畫は誤るなきを信ずべきのみ。
然りと雖、其首領とは果して誰れぞ。
其名何處の海岸にも鳴りひゞき、又た恐れられ—彼等問ふとも此上知ること絶えてなし。
彼れ其部下に交はらず、たゞ命令を爲すばかり。
言葉甚だ寡きも　其眼は鋭く、腕は敏し。
彼等と共に樂しみて、其宴會に調子を合はすと更になし。
然りと雖其寡默は、成功を以つて償へば、彼等咎むることあらず。

首領の爲めにと、何者も、杯充たす者はなく、
其杯を彼れは尙ほ、味はふことなく次に廻はせば—
彼れに對する遠慮として—
粗剛極まる水夫等も、同じく口をも付けずして、又た其まゝに廻はすなり。
世上最も粗製のパン、いと美しき園生の草の根、
夏の榮華の果實の少量、
これぞ短かき、粗末なる、彼れの食事に、供ふるもの。
此くの如きは仙人の食卓なりとも、決して否むとなけん。
彼れ感覺の、下等なる快樂を嫌ひ遠ざけ、
其精神は克己禁欲に養はるゝものゝ如し。
『彼方の濱に』—彼等直に出帆す。『是れを爲せ』—其事直に爲

さる。

『直に準備し、我に從へ』—分捕必ず之れを獲。

言語や果斷なり、行動や沈着なり。

此くて彼等盡く服從し、彼れの意思を問ふもの稀なり。

若し問ふ者あらんには、答語極めて簡單、

侮蔑の眼に譴責を含ませ、此上答へを與ふることなし。

三

『帆は見えたり、帆は見えたり』—希望に對する約束の獲物

ならん、

かの國民—其旗—望遠鏡の視る所如何ん。

獲物なしとか、あゝ。されど歡ばしき船—

血染の色の信號旗は輕風に飜へれり。

然り—こは我黨の船の歸帆せるもの。

吹けよ、軟風、心地よく—黄昏前には投錨せん。

已に岬を廻りたり、

傲然と波を蹴立つる其舳首を、やがて我灣、受け容れん。

其勇ましき進行や、實に之れ壯觀なるかな。

白帆は翼なして飛ぶが如く—決して敵より遁るゝことな

し—

其波を蹴立てゝ進み行くや、宛も生命あるものゝ如く、

又た元行と爭ふを、敢てなすなるものゝ如し。

いかで、彼れ、甲板上の君主をば、感動せしめん其の爲

めに、

兵火を避け、又た難船を恐るゝことかこれあらん。

四

船の舷より、軋しり落つる鐵鎖の音はひゞくなり、
帆はまき卸ろされ、錨は振り下がり、
陸に集まり遊べる者等は
格子窓ある船の艫より、短艇のつり下げらるゝを見たり。
人手は揃ひ、櫂こぐ調子面白く、
淺き渚の砂の中に船の底をば突き込みぬ。
渚に立ちて互に手に手取りかはし、
歸帆を祝する聲にぎはしく、仲睦じく語るなり。
ほゝゑみつ、問ひつ、直ちに答へつゝ、

心は歡樂を期し待てり。

五

報知は廣まり、人々群れて集まりぬ。
語れる聲はにぎはしく、笑へる聲は音高く、
婦のやさしき、氣遣はしげなる、調子の聲も聽こえつゝ、
一語一語に、友の―夫の―情人の名を含ませて問ひけら
く―
『彼人等は無事なるか、吾等は成功を問はざるなり―
彼の人等には逢ひ得るか、又た其言葉は幸福を與ふるか。
激烈なる戰鬪にも、又た狂爛の怒濤にも、
勇敢なりしは疑はざれど―抑も安全なりしは誰々ぞ。

疾く此の處に出で來り、妾達を喜ばし、又た驚かし、
樂しみ喜ぶ此眼より疑念の雲を接吻し去れよかし。』

六

『首領は何處ぞや。報道すべきことあるなり—
吾等の歸帆を歡びし、此喜びは恐く短かゝるべきか。
其はたとひ短かしとも、眞心よりの喜びなり。
されどもファン、至急吾等を首領の許に案内せよ。
挨拶濟まさば、互に歸帆を祝しつゝ、
皆人々の聽かんとせる、所に答へ語るべし。』
と言ひつゝ、岩切り開きし道を徐ろに、
港に面して峙てる、首領の住へる物見樓へと登り行きぬ。

道の左右に羊齒生ひ茂り、野生の花も咲き笑みつ、
白銀なせる泉より、すゞしき風を吹き送り、
花崗石の水槽よりは、清き流れは迸り、
玉と碎けて飛び散りて、生けるが如く—澄みかゞやきて
人の渴きをとゞむなり。
巖より巖を傳ひつゝ彼等は登り行き行きぬ。
彼處の洞窟近く、獨り淋しく海を眺めて、
劍を杖にし沈思せるは抑も誰れぞ。—
其劍、彼れの赤き手に、息の杖となることは、甚だ稀の
ものなりき。
『其は彼れなり、—コンラードなり—例に由つてたゞ一人。
行け—ファン—行きて吾等の來意を告げよ。

船は、彼れ、之れを見たり。首領に告ぐるに、
至急に之れに應せざる可からざる事の報道を、吾等の爲
さんとする由を以つてせよ—
吾等は彼れに近づくことを憚るなり—
其意外なるか、又た招かれずして入る時の、彼れの態度
を、汝は熟知すればなり。』

七

ファン彼れに謁(まみ)えて其來意を語れり。
彼れ無言なり、されども承諾の態度を示めせり、
こゝに於てファン彼等を招き—彼等進みて—辭儀を行ふ。
之れに對して彼れは少しく其身を屈めて禮せしも、其唇

は尚ほ無言。
『首領。此書狀はグレシア人の間諜より得たるもの、
彼れの言葉に從へば、獲物あるか、然らずば、危難は近
づき來れりと。
其何れならんとも、報告し得るはたゞ之れのみ。』
『靜かに靜かに』—コンラードは彼等の饒舌を中斷せり。
驚きて彼等羞らひつゝ姿勢を正し、
互にコンラードのつぶやく言葉を推測し、
數々コンラードの顏色を窺ひて、
如何に此報道を取りしかを、知らんと欲するものゝ如し。
然りと雖、彼れは恐く道理を外にし、
一種の感動、或は疑念、或は自信よりして想像したるも

のゝ如く、

巻物を讀みて曰く『之れ吾が手札、ファン、聽け—

ゴンサル　は何處ぞや。』

『投錨せる船中に。』

『彼れは其處に留まらしめ—此命令を彼れに傳へよ—

汝の職務に就き、—我が航海の準備を爲せ。

今宵吾れ自ら此遠征に加らん。』

『吾君コンラード今宵なりとか。』

『然り、日沒。

日暮るれば微風新に生ずべし。

吾れは胸當と陣羽織。—一時間せば出發せん。

汝の喇叭を肩に掛けよ—吾短銃の撥條機は

吾れの信用を價して、果して錆びざるや否やを調べよ。

襲擊用の我が劍は其刄を鋭くし、

其鍔は、善く吾手に適するやう緩うせよ。

武器掛をして迅速に、よく是れを整頓せしめよ、

曩きの日には、吾腕は敵よりも疲勞したり。

號砲は正確に發砲するに注意し、

停留時間終りし時は、之れを知らすることを爲せ。』

八

彼等は直ちに、再び海に出でんが爲めに、

敬禮を行ひて、急ぎ引き下がれり。

されどもコンラード自ら指揮すと云はゞ、一人として怨

むものなし。

彼れの決定したる所、誰か敢て質問せん。

寂寥孤獨の不思議の此人、

微笑だも殆ど之れを爲すことなく、歎聲を洩らすことも

亦稀なり。

其名は能く、水夫中の最も猛烈なる者をも戰慄せしめ、

汐風に燒けし頰は、又た聊か黃色を帶びたり。

されど尙ほよく、命令の力を有して彼等の精神を左右し、

以つて彼等を眩惑せしめ、之れを指導し、又た粗暴なる

輩の心膽を寒からしむ。

此く其無法の徒が、自ら告白して、之れを猜むと雖、

而も尙ほ反抗すること能はざる、其魔法は果して何ぞや。

之れ即ち思想の力—精神の魔術なり。

成功を以つて之れを結び、熟練を以つて之れを保ち、

他人の弱きを捕へて自家の意志のまゝに型成す。

故に彼等は、其手を以つて事を成すとも之れを悟らず、

彼等の成したる偉大なる事業をも、首領の自ら爲したる

如く思はしむ。

天が下の事物は、昔も然り、將來も亦然るべし、

多數は尙ほ、一人の爲めに働かざる可からざるなり。

之れ自然の定めなり、—とは言へ勞働する憫れの者よ、

怨む勿れ惡む勿れ、かの、汝の獲物を取る所の彼れを。

あゝ、若し赫々たる鐵鎖の重きを知らば、

此くの如きの小苦痛は、げに〳〵輕きものたるのみ。

九

太古の英雄豪傑等の、
其行の半ば神たり、少くとも其容貌の神々に等しき如く
ならず、
コンラードの形體には、何等の歎頌すべき所あるなく、
たゞ其色濃き眉毛は、烱々たる眼光を蔽ふあるのみ。
強壯なり、然と雖へーラクレースの筋骨隆々たるに非ず、
一見何等魁偉なるなく、常人の體格なるのみ。
されども顧みて彼れを熟視するものは
全體上、種々俗人等以上のものあるを見ん。
人々彼れを熟視して、如何なればと之れを異しむ。

されども其は其如きを告白するのみにして、何故に然る
かは、之れを考へ能はざるなり。
彼の頰は日に焦げ、黑き髮は自然の豐かさに環を捲きて
其高き、青白き額を蔽へり。
其傲慢なる思想は之を抑制すれど、隱蔽するは甚だ難く、
彼れの隆起する唇は數々之れを表はすことを强ふるなり。
其音聲は柔和にして、其動作は靜かなれども、
尙ほ、彼れには見へざりし、或ものありて見ゆるなり。
彼れの面に表はるゝ深き線、又た變化する顏色は、
時に人目を引くと雖、又た之れを惑はせて、
彼れの精神の暗黑中には、
恐ろしき感情—されども說明すべからざるもの働けるか

の如く思はせぬ。

要するに、何人も正當に語る能はず—

彼れの嚴格なる一瞥は、餘りに綿密なる詮鑿を壓伏し去るに由らん。

彼れの探索する眼光の十分なる敵對を蔑如して、

能く之れに敵對し得る容貌の者は蓋少し。

若し「狡猾」が彼れの心情を探らんとし、又た其變化する顏色を檢せんとして凝視する時は、

彼れは直に、却つて觀察者の目的を察知するの熟練を有せるなり。

此故に彼れ、此首魁を日光に暴露せんよりも、

寧ろ自家の秘密の思想が此首領に洩れんことを恐れて、

自ら其詮鑿を撤回するなり。

彼れの侮蔑中には「嘲笑の魔神」ありて、

以つて忿怒と恐怖との感情を喚起せり。

苟も暗然彼れの憎惡の面色降れる處、

希望はこゝに遁れ去り、憐愍(あはれみ)はこゝに別を告げん。

十

害惡思想の外觀は甚だ輕少なりと雖、

其內心—其內心—こゝに彼れの精神は作用せり。

愛は憎惡、大望及び奸策等、種々の變化を呈すと雖、

苦笑の外何物も之れを洩らさず、

微かに捲き上(あが)れる唇と、抑制せる容貌に存する輕き蒼白

き色と—
たゞ是等のみ、彼れの心底に、深き感情潜めることを語
るあるのみ。
人若し其の相貌を判斷せんとして、彼れを見んと欲せば、
自己は見られざることを要す。
乃ち彼れ、急ぎ足をなし、其眼は之れを上に向け、
拳を握り、苦悶を停め、
以つて恐懼の其態度中、人の歩(あゆみ)の餘りに近づかざるやう、
驚きて耳を聳て、
次には—各の相貌は其心情より作用し出て、
決して消滅するに非ず、—却つて强勢となるに放縱された
る感情は、

昂騰し、痙攣し、紛爭し—或は氷り、或は燃え、
以つて頰にかゞやきつ、或は額に冷却す。
此に於て未知の人よ、汝若し之れを能くし、又た恐怖戰
慄せざらんには、
彼れの精神を見よ—之れ其運命を慰安する殘餘なり。
其寂寥にして枯落せる心胸が、
如何に呪はれたる數年の殘害心を、無情に硬めたるかを
見よ。
見るべし—彼れの如き人間の—其秘密の精神の自由に發
動する所を—
然りと雖果して何人之れを見たるか、或はまた見るなら
んか。

十一

されどもコンラードは、罪惡の生活を爲し、又た罪惡の最惡なる機械とならん爲めにとて自然の送りしものには非ず—其行爲が彼れをして、人間と戰爭し、天に反抗せしむるに至るの前、彼れの心は變化せり。失望の訓戒の爲めに、世界より扭ぢ曲げられ、言語徒らに賢なれども、其行爲や愚に出で、其意志や堅硬にして他人に服從せず、餘りに尊大にして屈伏する能はず、

其等の德性に由つて、彼れは欺かるゝ者と運定まり、爲めに是等の德義を以つて、不幸の原因なりとして之れを咀ふも、彼れ尙ほ己に不信なる惡人等を咀はず、善良なる人々に賦せられたる其等の德性をも、彼れに喜悅を殘こし蓄へ、又たは再び之れを與ふる方便を有せりとも思はず、其未だ靑年の活氣を失はざるの前、之れを恐れ、之れを遠ざけ、之れを誣ひたり。彼れの人を嫌ふや、遂に憐憫を感ぜざるの度に達し、忿怒の聲を以つて神聖なる命令となし、以つて或人の加へたる損害を、一切万人に報いんとせり。

素より彼れ、自己の惡人たるを知る、
されど他人も、外觀以上何等善きことあらずとなし、
其最も善良の者等と雖、彼れ之れを侮辱して僞善者なりとし、
大膽なる者の公然と爲す所を、たゞ秘密に爲すに過ぎずとなす。
素より彼れ、自己の嫌はれたる者なるを知る、
然りと雖、彼れを惡む所の心情も、其實又た諂らはれ、
恐れらるゝものなるを知る。
孤立、荒凉、奇矯にして、
一切の愛情も一切の擯斥も、彼れ盡く度外視せり。
彼れの名は能く人を悲しましめ、彼れの行爲は能く人を

驚かす。
然りと雖彼れを恐るゝ者どもは、敢て彼れを輕侮ることなし。
虫は人能く之れを蹴れども、渦卷く蛇に向つては、
眠れる毒を覺ますの前に人は躊躇す—
前者は生きて、尙ほ能く輾轉し得れども、其打擊に復讎得ず。
後者は死す、—死すと雖其敵を活かして殘さず—
固く其不運なる加害者の身に纏はるなり、
人之れを壓し碎くことを得んと雖—之れ勝利に非ず—蛇は尙ほ其毒齒を咬み入れん。

十二

一切盡く惡なりと云ふには非ずして—其心情を活動せしめつゝ、
一の柔和なる情の未だ消え失せざるものあるなり。
彼れ數々他人を嘲笑して、
愚人小兒に相應しき情に瞞着されしものと爲す、
されども彼れ其情の爲めに、尙ほ徒らに全力を傾注せり。
此情や、彼れに於ても尙ほ「愛」の名稱を要求す。
然り、之れ愛なり—變ずることなく、—變じたることなし。
たゞ一人に向つて此情あり、他に移らず。
日々美麗なる女囚等は、彼れ之れを見ると雖、

敢て求めず、又避けず、たゞ冷々と觀過ごしぬ。
數多の美は獄室にうな垂るゝとも、
一人として彼れに嬌びて、心置きなき時間の彼れを、和げ得るものあることなし。
然り—之れ愛なり—其溫和なる思想は、
誘惑に試みられ、不幸に强められ、
不在に由つて動くことなく、如何なる風土に在つても固く、
まかのみならず、是等に優りて、時日の爲めに啣かだにも撓ゆむことなく—
其水泡に歸したる希望も、敗北したる策略も、
若し彼の女微笑せんとするときは、決して彼れを陰欝ならしめ能はず、

恐怒も激昂せしめ能はず、疾病も亦彼れを惱まして、
其の不平の囁きを、彼の女に洩らさしむること能はず、
彼れ尙ほ喜悅を以つて之れに面し、靜平を以つて之れに
處し、
以つて其憂の容貌をして、彼の女の心胸に達せざらしむ。
此情や、毫も移ることなく、又た移さんと脅かすものも
なし—
若し人間に愛なるものありとせば—是れこそは「愛」なれ。
彼れは素より惡人なり、誹謗の言語は驟雨の如く一身に
集まれど、
其情及び力に對して然るに非ず。
たゞ之れ一切其他の德義の去りしとを證するのみにして、

如何なる罪惡其ものも、此の最も愛すべき一を消し去る
ことを得せぬなり。

十三

急ぎの使の人々が、谷の方に第一の曲を降り行くまで、
彼れ暫く躊躇して後謂へらく、
『不思議なる報知かな—吾れは數度の危難は冒したり。
今回の此遠征は、我が最終のものなりとの、理由は之れ
を解せねど、
吾心之れを感ず。されども恐る可からず、
又た我が逡巡は、之れを徒黨の者に示めす可からず。
之れに面せんは暴擧なれども、

こゝに敵が吾等を驅つて、必常の運命に至らしむるを待つときは、死は、一層に確實なり。

若し吾が計略持續され、幸運吾れに微笑せば、

吾等は吾徒の死にたる者を葬りて、以つて之れを吊はん。

然り、彼等眠れよかし—又た其夢は安かれよ。

明る朝は、是等執念き海上の復讐者を溫めんと、

今宵、燎火高く燃くが如く、

此く煌々たる光もて、彼等を目覺ますことなけん(されど

汝微風爽かに吹け。)

次にメドラにかゝはりて、あゝ吾沈める心よ、

彼女の心は何時までも、汝よりも輕くあれかし。

されども吾れは勇敢なりき—凡てのものゝ勇氣ある所—

これたゞ卑しき誇のみ。

小蟲と雖刺すことあるは、自ら救はん爲めなるのみ、

一般普通の此勇氣は、吾等動物と共に分有し、

其猛烈なる勢は絶望より發生し、

其の功とすべきや小なれども、之れ吾が高尚なる希望に

して、

吾小數の徒を以つて、尚ほよく多數に匹敵するを敎へん

とし、

長の年月彼等を指導し—無益に其血を流さしめじと、吾

れは心を盡くしたり。

然るに今や中間なし—死するか成功するかの二途あるの

み—

其は其如くあらしめよ、—吾れは死するを憚らざれど、
此く彼等を勵まして、遁れ得ざる窮地に驅るは、吾れは
之れを思ふかな。
吾れ、吾運命を放任して、顧みざるや已に久し、
然りと雖係蹄にかゝりて破を取るは吾自信を憤慨せしむ。
希望も、權力も、生命も、遂に此一擧に棄て去ることは、
あゝ之れ果して吾熟練か、あゝ之れ果して吾技倆か。
あゝ運命—汝の愚行を咎めよ—汝の運命を咎むる勿れ。
運命尙ほ汝を贖ひ、又た晩からざることもあらん。』

十四

彼れ此く想ひ廻らしつ、

己が住居の樓建つ、丘の頂に着きぬれば、
聽きなれざりし、飾りなき、やさしき歌の聽ゆるより、
あばし戸口に足止めば、
上なる窓よりは尙ほ美しく聽こゆなり、
こは之れ彼れの愛せる美の鳥の、獨り調ぶる歌にこそ—

（一）

『妾が心の底ひには
　やさしき秘密はとこしへに
光に離れたゞひとり
　頼み少く住めるなり。
君の御胸に我胸の

そひたる時は嬉しきも、
君ましまさぬ其時は
又たも憂に沈むなり

（二）

妾の心の眞中には、
吊の燈はほの暗く、
人目に見ゆることなきも
いつもさびしく燃ゆるなり。
有りとも無きに等しくて、
光は微か、力なし。
失望の闇暗くとも

其を消すことを得も爲さず。

（三）

君よ妾を思ひ出よ。
あはれと思ふこともなく
妾がむくろ休むなる
此奥津城をな過ぎそよ。
妾が胸に唯だ一つ
忍びがたなき苦しみは、
君が御胸の中にてぞ
忘れんことを求むなる

（四）

吾がなつかしき微かなる
　終りの言葉聽きねかし
德義も咎め能はざる
　死にたる人をあはれみて、
何時も求めし一滴の
　涙を妾に與へよなー
此くまで深き吾が愛の
　報酬は終始これをこそ。』

コンラード、玄關を過ぎ廊下を横切り、

歌終えし頃、室に達して謂ひけらく—
『愛するメドラよ。何事ぞ、おん身の歌は確かに悲し。—』
『コンラードの不在中、喜ばしかると思ひ玉ふか。
妾の歌を聽き玉ふ、君は假令居ますとも、
歌は尙ほ妾の思想、妾の精神を洩らさで止まず、
妾の凡ての行は、思ふ所に、一致せざるを得ざるなり。
妾の口は噤むとも、妾の心は默ださゞり。
あゝ幾夜さか獨りさみしき閨の中に
暴風を恐るゝ妾の夢は、心の中に風を起こし、
君が乘ります船の帆を輕く吹くなる微風をば、
さもこれ强暴き疾風の、悲しむ前驅と思ひなし、
吹く風たとひ輕くとも、情知らざる波の上に、浮べる君

を傷むなる、
預言の挽歌と思はれぬ。
信義少き間諜の、若しや其火を消さんかと、
妾自ら、目標の、烽火を燃しかゞやかし、
心もとなき數時間は、御空の星を斷へずながめぬ。
此くて朝は來れども—君は尙ほ遙かにあり。
あゝ、げに冷たき陣風は、妾の胸に吹きすさび、
惱ましき妾が眼には、暗憺たる夜は明けぬ。
妾は尙ほも見つめつ、ながめつ爲すとても、
わが待つ船は、つれなくも、妾の涙にも眞實にも、又た
誓ひにも許されざり。
遂に正午となりし頃、妾は一の帆柱の、眼に映りしを祝

したり。
其船近づきぬ—あゝ彼方に去りぬ。
他の船は見えぬ—あゝ神—此は終に君が乘れる船なりき。
此くも悲しき生活は、止めんことこそ願はしけれ、されど君は然らずか。
わが愛するコンラード。平和の幸福を得んことは、之れを好み玉はぬか。
君は確かに、富より上のものを得玉ひ、
又た漂流を要せざる、輝く樂しき多くの家をも得玉はん。
君は妾の恐るゝ所を危險に非ずと知り玉へど、
此處に君の在まさぬ時は、妾はたゞ〳〵戰慄居るのみ。
妾の生命は憂ひざれども、

尙ほも貴き其生命が、愛より去りて戰に、思ひなやむぞ
　憂れはしき―
げに不思議なるは、妾には、此くまでやさしき其心情が、
自然、及び其善き意志に戰求ることにこそ。』

『然り、實に不思議なり。此心は久しき前に變じたり。
此心、小蟲の如く踏み付けられ、蛇蝎の如く復離されぬ。
此上、おん身の愛を措いて、他には望みも有ることなく、
天の惠の光を得るも、亦之れ難きことなるよ。
おん身の難ぜし吾が情は
おん身に對する愛にして、他人に對する嫌ひなり。
兩者固く結ひ合ひ、別つ可からずなれるなり。

吾れ若しおん身を愛し止めば、吾れはこゝに凡ての人間
　を愛すべし。
されど此事恐るゝ勿れ―一切過去の證明は
亦將來を保證して、吾が愛の永續するを明かすなり。
されど―あゝメドラ―おん身のやさしき心を勵ませ、
此時刻、吾等は再び別るべし―されども永きとには非ず。』
『此時刻、別るゝことは―妾の心前知せり。
此くて妾の幸福の樂しき夢はうすれ行きぬ。
此時刻―否―此時刻に、君は出帆し玉ふことを得じ。
かしこの船はたゞ漸くに錨を投しゝのみにして、
其船長は今ま尙ほ船に在ざるべく、
又た水夫等も、新に働く其の前に、休むとを要するなり。

愛する我が君、君は妾の弱きを嘲けり、
時に先立ち、妾の胸を固めんと、思ひ玉ひしなるべきも
妾の悲哀を弄び、戯れ玉ふこと勿れ、
かゝる娯樂は不快の外、何の益するともなし。
吾が最愛のコンラード、心靜かに妾の饗應受け玉へ、
妾の手は、其を調理するを喜べり。
君の質素の食事を撰び、其を整ふるは、實に容易きこと
にこそ。
見玉ひね、妾は、確かに、いと佳き果實摘み取りぬ、
又た確かならず、疑はしく、さは云へ好ましき其時は、
いと美しく見ゆるもの、妾、それぞと考へぬ。
妾は小山を行き返へり、流れすゞしき谿川に、三度も足

をはこびたり。
君の飲みます「シェルベット」は、今宵は味宜しく溢るべし、
見玉ひね、雪の如きの器の内、如何にすみてかゞやくよ。
君は葡萄の愉快なる、液汁は常に喜び玉はず、
其杯を見る時は、モスレム宗の人よりも、いたく嫌ひ玉
ふなり。
此く云はゞとて君を咎むと勿思ひそ、
人の悔やしと爲す所、却つて君の撰び玉ふは、妾の喜ぶ
ことにこそ。
さあれ、食事の準備とゝのひぬ、銀燭も飾られぬ。
「シロッコ」の風濕氣多きも、其をば意とし玉ふな。
妾の侍女も打揃ひて、

妾と共に踊るべく、又たは歌をも歌ふべし。
君の今尚ほ好み玉ふ、妾の彈かん「ギタール」は、
或は慰め、或は君を息ませんも—若しまた御耳をなやま
さば、
さばアリオストの語りたる
見棄てられにし美しき、オリンピアの、戀のはなしを物
語らん。
誓ひし言葉あだとなし、其乙女子を、見棄て去りにし彼
れよりも、
又たかの信に背きし英雄よりも、君は惡しき人となり、
など今妾を見棄てんとは爲し玉ふ—
海よく晴れて遙かなる、アリアドネーの島見ゆる時、

こゝなる岩の上に立ち、彼方を指さし示しゝ時、君微笑
み玉ふを妾は見き。
其時妾半戯れ、半恐れ—
年月經る内此くて又た、妾を見棄てコンラードも、海上
遙かに去らんかの
げに恐ろしき、疑ふ心起らぬやうにと、此事を語りにき。
彼れは妾を欺きぬ—再び歸り來ればなり。』
『再び、再び—屢々再び、愛するメドラ、
若し夫れ吾れに生命あり、又た希望あらんには、吾れは
必ず歸へり來ん。
今や「瞬時」は、力增したる翼もて、

別離の時を持ち來れり。

其何故と何處とは、語るも今は益あらじ—

凡て無情の「さらば」なる、言葉に終るのみぞかし。

若しも時間の許るしなば、吾れは語らまほしきなり。

恐るゝ勿れ—こは左程手强き敵には非ざれど、

不意に來れる襲擊と、長き準備の防禦に對し、

聊か常にまさりたる警戒防備を要するのみ。

吾れ、よし、彼方に行けりとも、おん身は淋しきことなけん。

吾れに仕ふる老女達、おん身にかしづく女子等はおん身と共に留まるべく、

此度得べき安全は、吾等の枕を高うして、安む樂しみ與

ふべく、

歸り來りて會ふ時の、其慰めと思ふなり。

聽け—喇叭のひゞき—ファンの烈しく吹けるなり—

接吻せん—今一度—又た一度—あゝ、さらば』

メドラは起ち上れり—飛び付きたり—夫の腕に抱かれたり。

かくてメドラのおし當てし顏の下には、コンラードの胸は張りつめぬ。

涙も出でざる苦悶にて、下うつむける、濃き碧き、メドラの眼をば上げしめて、

己が眼と、見合はすことも敢てせず。

艶やかなる長き髮は、ほつれ亂れて、却つてなつかしき

美を增しつ、

コンラードの抱ける腕に搖れ浮べり。

夫の姿を宿せる胸は、うつ其脈もかすかにて、

其感情を殆ど感ぜぬまでにせき込みぬ。

折しも聽ゆる雷鳴なす號砲のひゞき—

これ日沒を報ずるもの—此くて彼れ其太陽を咀ひたり。

再たび三たび狂氣の如く、彼れはメドラを抱きしめぬ。

メドラも亦、彼れの愛を願ひつゝ、無言に彼れに抱き付きぬ。

よろめきながらコンラードはメドラを寢臺に抱き行き、

これぞ最後の見おさめと、なるかの如くつくゞと、今

一たびながめたり。

彼れに取つては地球上、存在せるはたゞ一人、メドラの

みと思はれぬ。

冷たきメドラの額を接吻し—彼方に向ひ—コンラードは

行きにしか。

十五

『コンラードは行きにしか。』

此恐ろしき問ひの言葉は、不意に起りし寂寞中、幾度起

ることならん。

『瞬間の前なりき、彼れは此處に立ち居りしが、今は何處』—

と、云ひつゝメドラは玄關の外なる廊下に走り出で、

泣きくづおれて、遂に涙に咽びたり。

其涙、大なる玉をなし、光り輝き、たぎり落つるも、自らそれを知らざるなり。

されどメドラは尙ほもまだ、『さらば』の答を否むなり。

これ、如何に、吾等希望と信用とを、固く約束せりとても、

此一語—此悲しき一語には、失望呼吸すればなり。

是よりメドラの靜かなる、其青白き容貌には

悲哀の相は固定して、時間も之れを消すを得ず、

可愛かりにし、大なる眼の、やさしき色の其青きは、

たゞ茫然と空しき場所を打見まもり、

コンラードの姿の影を—あゝ遙かに—認むるまでは氷れる如く動きもなさず、

一旦これを認むるや、氷はこゝに溶け始め、眼は狂亂し

て漂ひ動き、

幾度か思ひ出さるゝ悲哀の涙は、

長き、黑き、かゞやける睫に露なしぬ。

『コンラードは行きぬ』—心ならずもメドラは手を、

痙攣しつゝ迅速に—又た次にはしとやかに、天にさゝげぬ。

メドラは起ちて見渡せば、海は汐に漲りつ、

帆の捲き上げらるゝを見たるより、再びこれを見るを好まず、

心はなやみ打ちしほれ、室にかへりて言ひけらく、—

『これは夢にはあらざりき—妾は見棄てられにしよ。』

十六

巖傳ひ、崖傳ひ、
嚴格なるコンラードは急ぎ下り行きて、一度だにも顧り
　みす。
されども曲れる道の角毎に、見ざらんとする我家の、
淋しく、しかも愛らしく、絶壁の上に見ゆるには、
見じとすれども尙ほ見えて、此くて彼れは惱みたり。
これぞ海より歸る時、先づ第一に彼れを迎ふる眺めなる。
又たかのメドラ―影ほの暗き陰欝の星―
其美の光は遙かより、彼れの眼には達するなり。
されども今やコンラード、彼女を眺むることも思ふこと
　も、何れもそれを爲すべからず―
彼れ其處に、休み得ざるに非ざるも、あゝこれ破滅の淵

に臨めるなり。
されども彼れや、一度殆ど、思ひ止まるに垂んとし、
其運命を偶然に一任し、其計畫を波浪に放擲せんとせり。
然りと雖否―此くの如きことある可からず。―
爲すことあるの勇將は、斷腸の思はよしこれ有りとも、
　婦女子の悲哀を表はすことなし。
彼れ其船を見―風また穩かなるを感じたり。
こゝに凛然一切精神の力を集め、
再び歩みを速めて急ぎ行きぬ。
聽ゆるものは急がしき音、喧騷のひゞき、
岸邊の混雜、叫べる聲々、
合圖のひゞき、櫂こぐ水音。

眼に見るものは、檣にのぼれる水夫、
錨の引き上げ、帆のまき上げ、
白波分けて船出する、其等の人を見送りて、
皆々手に振る白き巾、
しかのみならず、高く軟風に飜へれる、血染の色の彼れ
の旗。
彼れ異しみぬ、如何なれば其心、此くは柔和となりし如
きかを。
其眼なざしの燃ゆる火と、胸の中なる烈しさは、
凡て以前の、彼れのものと感じたり。
或は躍り、又た跳びつ、
險崖は終りて渚に達し、

こゝに聊か、其速力は緩みしも、
直に常の、威儼ある歩調に復して
新鮮けき海氣を呼吸せんと、立止まりしはいと短かく、
急迫の爲めに輕騷の、態度を人に示めすなし。
げにコンラードは、人を御するの法を熟知し、
術もてこれを隱蔽し、又た往々に、傲慢の樣を保てること
ともあり。
彼れの態度や尊大に、其打解けぬ容貌は、
人の見るをば嫌ふが如く—若し見る時は、其見る者を恐
れしむ。
其嚴正の風采と、氣韻高き眼とは、
卑しき所の快樂は、之れを却ぞけ厭へども、禮儀は之れ

を缺げるに非ず。

彼れ凡て、是等の威嚴を使用して、以つて衆に命令す。

然りと雖其彼れが、人懷けんとする時は、よく甚だ正直に、

其親切は聽く人の、恐れの思ひ取り去りて、

その深き、而もやさしき節の音調が、

己れ自身の心より、出でしが如く其心に、反響して聽ゆ

る時、

他人の天賦の其等資質は、彼れの言葉に比ぶれば、卑し

き如く思はれぬ。

さは云へ彼れの此態度は、其平常になき所。

彼れが懷けしともがらば、彼れはこれを意となさず、服

從せしめし者をのみ、彼れは心にとむるなり、—

其青年の時代より、胸に懷ける惡感は、

彼れに服せし者よりも、彼れを愛する其者の、價を輕く

見しめたり。

十七

準備の護衛は、彼れの周圍に整列し、

彼れの前にファン立てり。彼れ曰く『凡て準備は整ひしか』

『然り、準備十分整ひて、皆々船に乘り込みたり—

最後の短艇、たゞ吾君を待てるのみ。』

『吾劍と頭巾外套。』

直に固く之れを佩き、輕く之れを身に纏ひ、

其帶及び陣羽織は、彼れの肩に打懸けられぬ。

『ペドロを呼べ』。ペドロ來れり。
コンラード身を前に屈めて、友に盡くす最上の、禮儀を
以つてして曰く、
『此の手札を卿に渡せば、注意して熟讀せよ、
至高の眞理と信用とは、此に彫り付けあるなるぞ。
守衛を倍加し、アンセルモの船歸帆せば、
彼れも亦、此命令の如くせしめよ。
三日の後(風の都合宜しくば)太陽吾等の歸航を照らさん、
其時までは、平和はおん身のものなるべし。』
此く言ひて彼れ、兄弟海賊と握手を爲し、
其態度も應揚に直に短艇に飛び乘れり。
汐水したゝる櫂はひらめき、

漕く度ごとに、燐の光は四邊の海面にかゞやきぬ。
彼等本船に達し、コンラード甲板に立ち—
合圖の呼子吹き鳴すや、人々の手は其務にいそしみつ—
船はよく、舵に從ひ
水夫は凡て勇敢に、働らくを見し彼れはしも、心に之れ
を嘉みしたり。
彼れ其得意の一瞥を、若きゴンザルヲに向けぬ—
あゝ如何なれば、彼れは今回出發し、又た其内心悲しむ
ものゝ如きぞも。
あゝ彼れの眼は、岩の上なる樓を望み、
しばし別離の其時を、心に思浮べたり。
彼女—彼れの最愛のメドラ—果して船を見にけんか。

コンラードの、今の切なる此愛は、從來これが半だに、
愛せしことはあらざりき。
されども夜の明くるまでには、爲すべきとは數多あり—
再び心勵まして、彼れは彼方に向ひ行き、
室に降りてゴンザルヲとさし向ひ、
こゝに始めて其計畫、意味、目的を明かしたり。
煌々たる燈火の下に海圖を擴げ、
其他海上技術の參考物も備はりぬ。
此くて中夜警戒の時までも、熟議を彼等凝らしたり。
されど物思ひある其眼には、遲しと云ふ時あるべきか。
此くせる內、順風さわやかに吹き來り、
船は小鷹の飛ぶ如く、いと速かに進み行き、

小島むら立つ、數多の岬角打過ぎて、
明る朝の微笑する—久しき、久しき其前に—敵の港に入
らんとせり。
やがて、狹き灣の內、太守の艦隊浮べるを、
夜の眼鏡は認めたり。
彼等其處なる船の數かぞへ、不注意極まる燈火は、
油斷を爲せるモスレム人の其上に、かゝやき照らすを見
たりけり。
かくて、コンラードの船は安全に、又た注意せられず、
行き過ぎつ、
ひそみかくるゝ目的の場所に錨をおろしたり。
此場所はこれ、險しき山の、樣面白く聳ちて、

突出したる岬もて、敵の偵察より隱れし所。
こゝに、彼等一同憤起せり—これ眠より起きしに非ず—
起ちて海陸何れの行動にも、共に適する身なり整へ、皆
其職務に從へり。
されども首領は渦卷く波を眺めつゝ、
物靜かに談話せり—談話は尙ほ血に關したるものなりき。

第二 劇

"Conosceste i dubiosi desiri?" —DANTE.

一

*コローンの灣には泛々と、多くの兵船浮びつゝ、
コローンの館の窓よりは、燈火の光かゞやけり。
これザイド太守、海賊を掃蕩し、
捕虜となして、歸り來らん其時の、
前祝の宴會を、今宵先づ開けるなり。
彼れ、其神及び其劍に之れを誓ひ、
又た皇帝の詔勅と、己が言葉は、必ず之れを實行せんと、
召しつどへたる兵船は岸邊に集まり、

水兵の數亦多く、聲高々に、廣言吐きてのゝしり騷ぎ、
遠しと雖隔てし敵を、彼等は此くも輕蔑し、
心は既に囚虜を召し取り、獲物は之れを分配せり。
〔ザイド謂へらく〕たゞ船出せばよし、
明る日の太陽は、海賊等の捕へられ、其港の占領さるゝ
を見るや疑なし。
眠らんと欲せば、衞兵暫く眠りて可なり。
戰ふ爲めに目覺むる要なく、たゞ賊を殺すことを夢むべし。
爲し得るものは、凡てと雖上陸散歩し、
*熾え立つ勇氣を、グレシア人に試み養へ—
奴隷輩の目前に、白刃を振り廻はす—
此くの如きの行ひは、勇敢なる「*ツルベンド」帽に相應は

しゝ。
グレシア人の住居をば、困しめ惱ますとは云へど、彼れ
は殺さで免るしやれ、
吾等の腕は强しとも、今日は恩惠を施こせよ。
たとひ能くし得るとても、打擊を加ふること勿れ、
若し何事か愉快なる出來心の、打擊を思ひ起こさぬ上は、
其實行は、之れを今や、面せんとせる、敵に對して保存
せよ。
宴樂し、歡笑し、以つて今宵の時間を過ごせ。
*苟も、頭纏はんと欲する者は、笑まざる可からず、
モスレム信者の其口は、最も優れる、愉快を生ずるもの
なるよ。

されば賊を掃蕩する其時まで、吾等の呪は蓄へ置け。

二

館の上座に、「ツルベンド」帽せるザイドは、斜に肘に打凭れ、
其周圍には、配下に屬する、鬚髯いかめしき諸大將は居並びて、
晩餐及び終りの肉粥も片付けられ、
奴僕等は、嚴正なるモスレム宗の人々の爲め、
眞面目なる、樹の實の汁を運び配れど、
ザイド一人は、禁制の飲料を敢て鯨飲したりとは、人々の言へる所。

長き煙管は、解けて散るなる雲を起こし、
アルマの妓女等は、俗曲に合はせて舞ひ踊れり。
明る朝の太陽は、大將達の船出を見ん。
されども今宵は海上暗く、波は聊か不穩なれば、
宴會に列せし人々は、荒き海上に寢らんよりも、
絹布の夜具に寢るこそ、寧ろ安けれ。
能くするものは、尙ほ其處にても、樂しめよ—時來るまでは鬪ふことの要はなし。
「コーラン」の經典を信ずるよりも、多く戰勝を信ずる勿れと。
されど、此處に集まりし者供は、
太守の自慢に尙ほ優り、今一層の大言せり。

三

恐る〳〵戸の外より、
其處に事ふる、奴僕の者は入り來り、
注進する其前に、
床の上に低頭平身、扨て曰く—
『海賊に捕へられ、其巣窟より、遁れ出でたる一人の「デルギッシュ」
たゞ今此處に參りたり—其餘の事は、彼れ自ら物語らん』
ザイド承諾の目くばせゝば、
奴僕は無言に、此聖者を近く伴ひ來れり。
彼れ、暗綠色の胴衣の上に腕を組み、

歩みは弱く、其容貌は悄衰し、
年齢よりも、寧ろ勞苦の其爲めに、疲れ弱れるものゝ如く、
彼れの頰の蒼白きは、恐懼に非ず、懺悔に由つて然るが
如し。
己の神に誓願して—其黑髮を打被り、
けだかき冠は傲然と、其の上にそば立てり。
寛き長き、彼れの法衣を着流して、
たゞ天にのみ捧げたる胸を纏へり。
彼れの態度は柔和なれども、尙ほ自尊を以つて其身を堅め、
泰然として、諸人異樣の注目に對し、
太守が談話許るすの前、
此處に來れる疑問をば、問はれまほしき面色あり。

四

『何處より來りしか、汝「デルギッシュ」。』

『海賊の巣窟より、脫走し來れるなり。』

『汝は何處に、又た何時捕へられたるか。』

『*スカラノヴの港より、*スキオス島に至るの間、吾が乘る船は捕へられしも、神は吾等を幸せず、モスレム宗の商人の、財貨は殘らず奪はれつ、吾等の手足は、鐵の鎖にいましめられぬ。吾れは恐るゝ死もあらず、誇らん富も亦持たず、さまよひ廻る自由の外、吾が失ひしものはなし、

然るに遂に夜に乘じて、小き漁舟は、吾れに希望をもたらして、

脫走の機會を與へしかば、

吾れは其機を逸せずして、こゝに安全を見出しぬ—

最も力に富める太守—閣下と共に在る以上、誰かは恐るるものあらん。』

『海賊等の榮ゆる樣は如何にぞや。

奪ひ盜みし財寶貨物、又其窟屋を守るなる、警固防備は全きか。

彼等を討伐せん爲めの吾が此準備—

火を以て蝎燒かん爲め、其巣窟ふ如きをば、彼等夢にも

之れを知れるか。』

『太守の君よ、捉へられたる捕虜の目は、
たゞ泣いて、遁るゝことを求むれど、偵察爲すには適せざり。

吾がたゞ聽きしは、心なき水の叫べるのみにして、
其等の波は、彼方の濱より、吾れをば運び去らんともせず、
吾れたゞ光榮(さかえ)ある太陽と、大空(おゝぞら)とを見たりしが、
捕虜としての吾身には、其光は餘りに輝き、其色は又た餘りに青かりき。

其時吾れは以爲らく、苟も、自由の胸を歡ぶ者は、
吾れの涙を乾かす前、先づ鐵鎖を破れよと。
吾が脫走の此點より、少なくとも、閣下之れを判じ得ん。

彼等は吾れを聊かも、危險のものと見ざりけん。
若し夫れ然らず彼等にして、警戒注意せしとせば—
吾れ此くこゝに遁るべき、機會を祈り求むるも、何等の益もなかりけめ。

吾が脫走を見ざりける、かの不注意の守衛等は、
閣下の軍勢近づく時も、亦同じく不注意ならん。
太守の君よ、吾が身體は疲勞せり—
自然は、饑えて食を求め、波に搖られて休みを求む。
暫く吾れに退坐を許るせ—閣下を始め一坐の面々、皆其上に平和あれ。
願くば休息を許して—吾れを自由のものとなせ』

『待て、汝「デルギッシュ」。吾れ尙ほ汝に問ふことあり、待て。
吾れ汝に命令す—坐せ—汝聽くか—從へ。
尙ほ問ふべきことあるなり。食物は奴僕之を持ち來らん、
人々晩餐せるなるに、汝一人かこつ勿れ。
食事終らば—汝答ふる準備せよ、
明晰に十分に—吾れは隱秘を愛せざり。』
あゝ何事の、信神なる此人を、怒らせしかは、想像する
だに無益なり—
彼れは此種の坐席を好まず、
强ひられたる此饗應を、いたくたしまず、
此席上の客人等を、更に尊敬せざるなり。
されど之れただ、瞬時に頰を去り行く發怒、

やがて直に鎭靜し、
彼れは默して其坐に就き、
其容貌は、前に失ひたる靜かさを回復せり。
馳走は運び來されたり、
されども豪奢の食事は、之れを嫌ひて、毒物或は、混ぜ
る如く思ふなり。
これ、人、久しき勞働と、又た斷食の刑受けば、
彼れ不思議にも、奢侈の食事を、罷むるものなる故ならん。
『何をか惱める「デルギッシュ」。憚ることなく食すべし。
是はこれ、耶蘇宗徒の食事と思ふか、はた又た吾れの朋
友は、汝の敵と思へるか。

鹽を嫌ふは何故ぞ、一たび之れを食すれば、
敵の劍を鈍らしめ、
不和亂雜の種族等は、平和に之れを結合し、
憎くめる敵は兄弟の、思ひあらする誓約のまるしなるぞ
かし。』
『鹽はよく、美味を旨からしむれど、
吾食物は、最も卑しき草葉の根、吾飲料は、たゞ單純の
細谿川。
吾れの嚴びしき誓約と、吾宗門の規則とは、
朋友とも又た敵とも、共にパンを割き、又たは、雜ゆる
ことを禁ずるなり。
若し何物か、恐るべきものありとせば、其災厄は、吾れ

の一個の、頭の上に存するなり。
此く言ふ時は、或は奇異の感あらん、
然りと雖、閣下の威光を以つてするとも—否なゝゝゝ—ス
ルタンの帝位を以てするとも、
たゞ吾れ一人に非ざるよりは、如何なるパンも如何なる
食も、決して口にせざるべし。
若し宗門の規則に背かば、
吾れは預言者の憤怒を被り、メッカの堂に巡禮すること叶
はざらん。』
『汝は精進主義の人—然らば欲する如く爲せ—
今一つの問ふべきこと、これに答へば靜かに彼方に行き

得べし。
幾何の―あゝ夜は未だ明けざるべし。
如何なる星―如何なる太陽は此灣の上に破裂したるぞ。
烈火の如く輝けり―行け―行け。
あゝ―謀叛なり―護衛兵―吾が劍を―
吾が艦隊は燃え上れり、吾はこゝに隔たれり。
惡さも惡き「デル ギッシュ」―是等汝の消息―
汝は奸惡の間諜よ―彼れを召し取り―彼れを打斬り―直
に彼れを殺すべし。』
「デル ギッシュ」は突ッ立ち上がれり―火焔の揚がるを合圖と
して―
其速や變りの、人々を驚ろかしゝや非常なり。

かの「デル ギッシュ」は突ッ立ち上がれり―今や僧衣の「デル ギッ
シュ」に非ずして、
甲着けたる武者のいでだち。
今まで冠りし帽子を投げ擲て、今まで纏ひし法衣を引き
裂き―
甲の胸はきらめき輝き、劍の光はひらめきわたれり。
締まれる彼れの、輝く兜は、黑き羽根もて飾りなし、
彼れの眼はいやまし輝き、黑き額は愈々暗黯として、
モスレム人の眼くらませ、アフリットの妖怪現はれ出で、
其恐るべき死の打擊には、又た戰ふの、望みなしとまで
思はせたり。
亂暴なる混雜名狀すべからず、

上には火焔天を焦がし、下には炬火燃えかゞやき、
劍戟相撃ち、鬨喊盛に起り、
恐怖の叫び、苦痛の聲々―
地球上此一點の場所の上には、地獄の空氣、投げ落とされしと思はるばかり。
あわて亂るゝ奴隷等は、右往左往に遁げまどひ、
慘憺たる海岸と、炎々たる海上とを見るばかり。
「デルギッシュ」を捉へよ―「ザタナイ」を捉へよとの、
大守の怒號は、一人だも耳にするなし。
「デルギッシュ」は、彼等の恐るゝ樣を見て、始めの失望すて去れり―
これ、其徒黨が、命令を實行するの早きに失し、又た餘

りに從順に、
合圖に前き立ち、燒き打ちを始めしより、
一度は万事休すとなし、踏みとゞまりて死すべしと、覺悟をきわめたればなり。
されども彼れは其敵の、恐怖るゝさまを看て取りて―肩の帶より喇叭を引き出し、
短かしとても、而も激しく吹き立てゝ―
此く言ひけらく『急げ急げ、勇敢なる吾水夫―
彼等進退の速かなるを如何なれば吾れ疑ひし、
又た豫定の計畫は、吾れを一人、こゝに見棄てたりと思ひしや』と。
其長腕をさし伸べて、劍揮り廻はし、

始めの躊躇は直に之れを償なひつ、
彼等の恐怖に付け込みて、其奮迅の功を收め、
多數の者等を腑甲斐なくもたゞ一人に屈伏せしめぬ。
こゝに於て、打ち破られし「ツルベンド」帽室内に散亂し、
一人として腕を揮ひて、其頭を守らんとする者なく、
ザイドの如きも、忿怒に驅られて、痙攣し、驚愕し、
輕侮するにも拘はらず、彼れの前に遁走せり。
彼れ怯懦なるに非ざれど—而も尙ほ打擊を恐れ、
大狼狽は敵を見て、非常の優勢と思はせぬ。
剩さへ、燃え上れる艦隊は、彼れの眼を惑はせつ、
彼れ其鬚髯を搔きむしり、憤悶しつゝ、鬪ひの場を遁れ
たり。

これ今や、海賊等は婦人寮の門を通過して、闖入し來り
たれば、
其を待つ時は死するあるのみなればなり。
こゝに非常の「驚愕」は、絶叫しつゝ—膝きつゝ、
劍を投げ棄て願ふと雖、其甲斐なく、—血は盛に流さた
れり。
海賊等は潮の如く、
コンラードの喇叭の呼びし方に急ぎ來れり。
殺さるゝ者の呻吟、助命を求むる者の悲鳴は、
コンラードのいかに巧みに、此爭鬪を爲し遂げたるかを
示めすなり。
見れば彼れの容貌凄愴く、一人其處に突ッ立ちて、

宛然食に飽きたる猛虎が、其巣にありて、獲物を寸斷せる如く―彼等之れを歡呼せり。

彼等の挨拶も短かゝりしが、彼れの答へは一層短かく―

『成功可なりに善し―されどもザイドは遁れたり―彼れは是非とも殺すべし―

多くの事は成したれど、尙ほ多くの、爲すべき事の殘れるあり―

彼等の艦隊は燒け失せたり―何ぞ又た、其市街をも燒かざるぞ』

五

彼等直に炬火取つて、

高塔より廊下まで、殘らず之れに火を放てり。

嚴たる喜悅、コンラードの眼に現はる、

されど忽然消え失せたり―

これ、女の泣聲、彼れの耳をつんざきて、嘗ては戰場の哄喊にも、動かざりし其心に、

恐るべき吊の鐘の音聽く其如く、烈しく響きたればなり。

〔號令すらく〕『婦人寮を破るべし―命にかけて、一人の女性をも害すべからず、

記憶せよ―吾等も又た皆な妻を有せる者なることを。

然らずんば或は又た、吾等の妻の身の上にも、此かる烈しき復讎あらん、

男子は吾が敵―殺すべきは男子のみ、

然るに助けしことあれば―か弱き者は尚ほ一層に助くべし。
あゝ、吾れ忘れ居たり―若し此く云へる其内に、
助けなき者死しもせば、天は吾等を免るさゞらん―
吾れ行かん―心あるもの吾に從へ―時間は尚ほ有り、
庶幾くは、吾等の心は聊かなりとも、罪を輕うし得るな
らん』と。

燒け音烈しき階段をかけ上り、戸を打破りて進み入れり。
床、燒けたれども、彼れの足は熱きを感ぜず、
黑煙渦卷き、呼吸數々むせぶと雖、
尚ほ一室より他室にと、縱横左右にかけ廻れり。
此くて彼等捜索し―發見し―救助し、
其筋骨逞ましき手腕は、各々皆な、顧みられざる美を抱

き出だし、
防禦の力を備へざる美の、求むる所の十分の注意を用ゐ、
彼等の强き恐れを靜め、弱りはてたる身を援けぬ。
コンラード此くもよく、海賊等の猛烈の態度を和げ、
血潮に染めし手を制御せり。
然りと雖コンラードが、立ち昇る黑煙中より、又た戰鬪
の壞頽中より
抱き出でたる其女性は、果して何者なるべきぞ。
コンラードが殺さんとせる其人の、愛せる者にあらずや
は。
然り、婦人寮の女王なり―されども尚ほザイドの奴隷な
り。

六

こゝにコンラードは、短少時間グルナレーに辭儀を行ひ、簡單なる數語もて、おのゝきおそるゝ是等の美に、安全なるを確かめたり—

これ憐哀の情が、戰鬪より他に引かれたる其間に、一散に遠く遁れんと爲したる敵軍は、顧みて、其追擊されざるを異しみ、始めの程は徐々に遁走したれども—こゝに再び集合し—

終に抵抗するに至りし故なり。

ザイド之れを見て、味方の兵に比ぶれば、海賊の軍勢少なきを知り、

恐惶、驚愕中に遂げられたる、破壞を見し時、

赧然として、其誤りなりしを辱ぢたり。

こゝに於て「アラ、イル、アラ」の聲、復讎の叫びは盛に揚り—

耻辱の感は、之れを雪ぐに非ずんば、死せんとまでに激昂し—

忿怒は、再び歸へりて戰鬪を新にせんとし、

勝利を獲んと鬪ふものは、生命を賭して爭ふ時は、

火焔は火焔に、血は血にぞ、

一とたび滿ちし勝利の潮の、今や干潮となることを、告げ知らするを要すなり。

コンラード、危急なるを察したり、

其味方の水夫等が、盛り返へしたる敵軍に、撃退されて
惱むを見て、
彼等を鼓舞して曰ひけらく『努力せよ、圍める敵を、打破
らんには—今一努力』と。
隊形整へ—一致し—進撃し—動搖し—万事休せり。
狹隘なる線内に、壓迫包圍せられて、
絶望の位置にありと雖、勇氣は決して失ふことなく。尙
ほよく激戰奮鬪せり。
然りと雖、あゝ今や、彼等は堅固の隊形もて、鬪へるに
は非ずして、
或は圍まれ、或は分たれ、斬り斃ほされ蹂躙られ、
皆別々に、單獨に、無言に手痛く鬪ひて、

負けしと謂うより、否な、寧ろ、疲れて今や弱りはて、
刃の光朦朧と、死の手中に閃くまでは、
息ある限り微なる、彼れの最後の働きを、爲しつゝ遂に
絶え入りぬ。

七

然りと雖是れより前、ザイドの軍勢再び集まり、逆か寄
せ爲して來るの前、
隊伍整へ、手並そろへて鬪ふ時、
グルナレー、及び共に釋るされし、婦人寮の婦女子等は、
コンラードの、指圖のもとに
同宗敎のものゝ舍寮に、安全に屆け送られ、

生命及び名譽の爲めに、流しゝ涙を乾かしぬ。
年若き、黑眼勝ちなるグルナレー、
今まで、望失せはてゝ、彷徨ひありし感情を想ひ出だし、
かの海賊の慇懃に、其言葉の優さしくて、
其眼なざしの柔和なるを、獨り大に異しみぬ—
不思議なるかな—血潮に染みし强盜は、
ザイドの最もねむごろに、寵愛爲せる時よりも、いとも
溫和の思あり、
太守の、女を愛するや—奴隷の分際たるものは、
彼れの與ふる心情に、滿足せざる可からずと、云はんば
かりの態度なれども、
かの海賊は慇懃に、保護を誓ひ、恐れを鎭め、

彼れの捧ぐる尊敬を、受くるは女子の權利ぞと、爲せる
が如き態度なり。
『妾の願は善しからず—否な—女性に取つては最も惡しく
—益なきことなり。
さあれ妾は今一度、かの首魁をば切に見まく欲しきなり。
妾の愛する夫たる人が、露も心にかけざりし吾が生命を、
救ひし人に、若したゞ謝するのみとせば—妾の恐れ、其
を忘れしは何事ぞ。』

八

グルナレー、死屍纍々たる中に彼れを見ぬ。
されども寧ろ死を以つて、幸福なりとせる彼れより、其

呼吸を拾ひたり。

彼れ遠く、味方の軍よりかけ離れ、
必死に勝利を回復せんと、いきまく敵の一團と闘ひ、
打斃され―鮮血に塗みれ―而も、自ら求めし討死は、妨
けられて遂げも得ず、
從來彼れの行ひし、凡ての罪悪に復讎んとて捉へられ、
尚ほも生命を保たしめて、益もなく生かしめられ、
之れと同時に復讎は、新に爲せる意匠もて、苦痛に重き
を加へつゝ、
グルナレーの救へる血は、再び之れを濺がん爲め、暫く
之れをとめられぬ―
然りと雖、饜くことなきのザイドの目には、

其一滴一滴に、彼れを永久に死しつゝあらしめ、而も決
して死せしめず。
あゝこれグルナレーが、前に見し時、雄風凛々として、
勇ましく赤き其手を揮ふ時は、即ちこれ、部下の法則と
なりし所の彼れなるか。
是れ實に彼れなり―敗衂せりとも、其精神は敢て屈せず、
たゞ生命の存したるは、彼れ唯一の遺憾なり。
彼れ甘んじて負傷して、其の時若しも、殺し呉るる者あ
らば、
其者の手を彼れは、接吻せんとまで思ひしも、負傷は餘
りに輕かりき。
あゝ是等多くの負傷中、彼れの願はぬ天國に―

其靈魂を、送り遣る者あらざるか。
彼れは他の者供より一層に、死を得んとして、突進奮闘
したれども、
多數の同勢中たゞ一人、生き殘らざる可からざるか、
彼れ深く感ずらく—此く不實なる運命の輪の
從來犯しゝ罪惡と、其負債とを拂はん爲めに、
勝利者が長めし責苦に逆轉し來る時は、
人の心情は感ずる所あるべしと—彼れ深く、且つ暗憺と
之れを感ぜり。
然りと雖、其を行はせたる惡しき誇りは、今や此感情を
隱蔽せり。
其非常なる疲勞と、切痛なる負傷との爲め、活氣は之れ

を失へども、
彼れの嚴たる、自若なる容貌には、
捕虜の樣と謂はんよりも、寧ろ勝利者の風采現はる。
されど其を見し僅かの者は—いとも靜かに、彼れの四周
に見つめたり。
かの遙かに離れし者等の、遠くに聽ゆる叫びの聲は、
彼等の震慄の止みたる後、禮儀なくも、いや聲高く揚れ
ども、
近くに彼れを見たりける、善良なる武士等は
恐怖を敎へし其敵に、些かだにも禮儀を失ふとはなく、
彼れを獄屋に導き行く、恐ろしき容貌の守衛等も、
心の內に恐れつゝ、無言に彼れを見まもれり。

九

醫師は送りこされたり！されど惠みの爲めには非ず、
實は殘れる彼れの生命は、如何ばかりまで堪え得るかの、
試驗を爲さんためにして、
最も重き鐵鎖に堪え、
强き苦痛の其捩ぢをも、又た堪え得るを發見せり。
明日！然り！明日の夕の日は、
西の方に傾きつゝ、突き刺す彼れの苦しみの、始まりし
をば見るなるべく、
次の朝は又た常の、紅の色して昇りつゝ、
其れ等の苦痛は果して善く、堪えられたるか、たゞし又

た、堪えられざりしを觀るならん、
責め苦の最も長くして、最も苦しきものは是れにして、
其他凡ての苦悶をば、渴きに加ふることなるよ。
此くて食に飢えたる鷲は、刑場の上に飛び廻はるも、
死は日々、尙ほ其死刑を延ばすなり。
『あゝ水をか！水をか』！と、冷笑せる「憎惡」は憐れなる者の
願を拒むなり。
これ、飲ましむれば、彼れは直ちに死すればなり。
此くの如きは彼れの運命。！醫師も監守も彼方に去り行き、
傲慢なるコンラードをたゞ一人、鐵鎖に縛して後に殘せり。

十

彼れの心情如何になりしか―其を描くとも益無けん―
若し彼れ、之れを知れりとも、尙ほ漠然と、疑はしきも
のならん。
彼れの心中、種々の分子の痙攣し、結合して、
混亂したる勢力と、共に暗く衝突し、
悔ゆるなきの無念もて切齒するや、
こゝに心中戰爭あり、混沌あり。
かの「瞞着」の妖怪は、前には一言だも言はざりしが、
行ひ遂げし其後に、今や、叫びて曰ひけらく『吾れ前に、
汝に警告せざりしか』と。
無益の聲ぞ。燃ゆる所の、而も不屈の精神は、
尙ほ捩ぢ返へし、反逆するを得るものぞ―後悔するは。

薄志弱行の徒たるのみ。
一人寂寥しく、最も深く自ら感じ、
又た其本我が、殘らず凡てを、其自體に啓き示し―
かの靜平を棄つる單一なる感情も、又た有力なる思想も、
以前の如く、見られざるなく、探がされざるなき時と雖、
一旦心意の反省するに及びてや、
放縱なる思想は、皆盡く其數千の通路に闖入し去るなり。
此に於て大望の夢始めて醒め、戀愛は後悔となり、
光榮を浮雲視し、生命其物をも苦と觀じ、
歡樂は味はず、是れを喜ぶ人に對する、憎惡或は輕蔑は、
吾等の運命に於て勝利を得べく、
望なき過去と、急ぎはやれる將來とは、

地獄か、天國なるかの如く、大速力もて狂奔し去り、
行爲も、思想も、言語も凡て、其時來るそれまでは、
恐くば、爾く鋭く記憶されずとも、忘らるゝと絶てなく、
行ひたる其時には、輕快可憐と思ひし事も、
今や嚴しき、反省の下に在つては、皆な盡く犯罪なりと
感ぜられ、
不善を啓き示されざる、凋みつゝある精神は、
いかに隱蔽したればとて、腐蝕を少くするには非ず—
凡ての人の視て以つて、驚くべき其事は、
一言以つて之れを蔽へば、開きし墓と云ふべかり—
一旦「自尊」覺醒して。精神より其鏡を奪ひ取り—破り去る
の時までは、

赤裸の心は、其葬りし悲哀をば、皆盡く曝露せり。
然り「自尊」は能く隱蔽し、勇氣は如何なるとをも敢てし—
一切—一切—慘憺たる沒落の—前なること—彼方のこと
敢て之れを能くするなり。
人皆な或恐懼を有すれど、外面に表はす少き者は、
稱賛に値する、唯一の僞善者なり—
能く大言壯語するも、而も避易する怯懦なる輩に非ず、
たゞよく泰然と死に面し—靜かに死する者のみ然り。
此く其遼遠の前途を熟慮し、精神を鍛錬したる彼れ、
死若し近くに脅かさば、自ら進みて、中途に之れを邀ふ
るなり

十一

最も高き、樓の中の、高き一室に、
太守の權力もて縛せられて、コンラードは、一人坐せり、
太守の館は燒き拂はれ、
城塞の內には、捕虜と宮廷とを併せ存せり。
コンラード、いたくも太守の宣告を難ずることなし、
これ、若し敵にして敗るゝ時は、又た同樣の宣告を、彼
れより受くるべければなり—
コンラード一人坐し—寂寥中に、罪ある己が胸中を察し、
又た自ら激勵すれども
たゞ一つ、堪え能はざる—敢て堪えざる思想あり—

『あゝ此消息、メドラ如何にか受くるならん。』
こゝに—たゞ此時にのみ—鐵鎖のひゞく兩手を上げて、
怒りて激しく緊き張りて、暫く之れを睨みたり。
されど直に氣付きしか、心を他に向けたるか、はた又た
慰藉を夢みしか、
自ら己れの、悲哀を嘲けり微笑みつ、
『責苦よ來れ、來らんとする時或は又、來り得る時何時に
ても、
其日の爲めに精力を、養はんには今一層、吾れは休息を
要するなり』と。
此く言ひて、疲勞して蓆の上に身を横へ、
如何なる夢をや見たりけん、彼れははやくも熟睡せり。

元來此騷動の始まりしは、漸く中夜の頃なりき、
これ、コンラードの計畫の熟したるやいち早く、これを
實行したればなり、
又た『大破壞』なるものは、大に時間の消費を嫌ひ、
殆ど未遂の罪惡は、これを殘さず、
コンラードが運命の潮流に抵抗して—
變裝し、看破され、勝利し、捕虜となり、宣告さるゝ其
れまでは。時は殆ど一時間—
陸に在つては首領たり、海に在つては破法者彼れ—
破壞し、救助し、禁獄され、今や此處に熟睡せり。

十二

彼れの睡れる容貌は、いとも靜かに、
其呼吸は甚だ深く—あゝげに死せるが如く、幸福のさま
なるかな。
彼れは眠れり—其靜けき眼を、見守れるは誰なるぞ。
敵は凡て去り行けり、彼れはこゝに友は無し。
そも之れ恩惠與へんと、遣はされたる天つ御使にてもや
ある。
否とよ、これ、天つ御國の清き容貌、而も地上の人の姿
にこそ。
白き手には燈火持てども、
閉せる瞼に、光りまばゆくあらせじと、やさしく其れが
光を蔽へり。

彼れの瞼の開かん時は、これ苦しまんのみにして、
一たび開く其時は—たゞ一度、再び閉ざされ能ふのみ。
女の姿—眼は黑く、頰美しく、
珠もてよそひ、編みかざりたる髪の毛は、褐色の波を打
たせつゝ。
仙女の輕き其形—
雪の如き白き足は、地を踏みて音もなく—
警衛の目をくゞりつゝ、夜の暗黑を厭はずて、如何に爲
してかこゝには來れる。
あゝ、寧ろ問はんグルナレー
汝の如き若かやかさと、哀憐の心に導かれたる女性にし
て、何をか爲さゞるものやある。

グルナレー眠る能はず—太守は眠りて
つぶやきつゝも、而も海賊の客を夢みる時、
彼女は太守の傍を離れ出で—
前に屢々戯れに、女の指を飾りたる、太守の印章の指環
をはめ—
僅かに咎むる者ある時は、指環をこれに示めしつゝ、
其印章の威光には、皆な從へる寢むげなる、守衛の場所
を過ぎ行きぬ。
守衛の者等は勞苦に倦み、又た戰鬪に疲れはて、
其眼は却つて、コンラードの睡眠を羨やみつ、
樓の戸口に力なく、頭うなだれ、
不樣にも手足投げ出し、守衛と云ふは名のみにて、

僅かに頭もたげつゝ、其印章ある指環をば、禮するのみにとゞまりて、
印章は果して何をか意味し、又何人が持てるかは、問ふ者絶えてあらざりき。

十三

彼女驚きつゝ、打見守りて曰ひけらく『彼れの沒落。或は破滅を哀れみて、
他人の此眼は、泣き悲しめるにかゝわらず、如何なればにや彼れは此く、靜かに眠り得るならん。
妾の胸は、不安の爲めに、こゝにさまよひ來れるなり—抑もや、如何なる意外の魔術により、此人此くは可愛き

ぞも。
げにや—妾の生命も、尙ほ其上も、妾は彼れに負へるなり。
彼れは妾も吾友も、不幸よりも尙ほ一層、惡しきものより救ひたり—
思ふも今やそは晩し—靜かに。彼れは目をさましぬ。
彼れの吐息の重きかな—彼れ驚けり—目覺めたり。』

彼れ頭をもたぐるや、其光に眼くらみて、
其見る所正しきか、否かを疑ふ如きなり。
彼れは其手を動かしゝが—軋り擦れ合ふ鐵鎖の響は、
彼れの再び生きたることを、甚だ不快に告げ知らせり。
『其處なる形は何者ぞ、空氣中の、虛しき影には非ざるか。

或は監守の容貌の、驚くばかり美しき、形に見ゆるもの
なるか。』

『海賊よ、君は妾を知らざらん、
されども君の健氣なる、其行ひを、深くも感謝せる者ぞ。
妾をよく見―妾を想ひ出玉へかし。
君の腕は火焔の中より、又た一層に恐ろしき、君の手下
の軍勢より、妾を救ひ玉ひたり。
闇を犯して、妾はこゝに來りにき―何故なるかは妾得知
らず―
さは言へ害せん爲めには非ず―妾は君を死せしめじ』
『いと情ある貴き夫人、若し果して然らんには、

おん身の目のみは、華美なる希望を樂しとせぬ、たゞ一
人のそれなるかな。
彼等の爲すは偶然のみ―權利のまゝに爲さしめよ。
されど彼等の親切か、或はおん身のそれなるか、吾れ尙
ほ之れを感謝して、
此く美しき靈場に吾れを告白せしむるなり。』
實に不思議にも―至極の悲哀は快活と、連なる如く觀ゆ
れども、
慰藉與ふることはなし―
かの「悲歎」の快活は、決して心まぎらさず、
苦がき樣して微笑せり―されど之れ尙ほ微笑なり。
時には最も賢明に、又た秀でたる人にして、

諧謔もて、死刑臺をばとよませて、響きわたらすことあれど、

然りと雖、其れと種類の同じき如き、喜悦を以つてせしことは、未だ嘗てあらざりき。

この者よく、凡ての心を欺くも、其内心は欺き得ず。

何物の、コンラードの腦中に、閃きしかは問はずもあれ、

今や笑ひの性情は、半、額をもたげつゝ、

さもこれ彼れが地上にて樂しみ得べき、最後のものゝ其如く、

彼れの是等の言葉の調子は、愉快の音を帶び來れり。

されどこは之れ、彼れの性質に違ふなり—彼れの短かき一生中、

その有したる感情は、陰欝と奮鬪との外、甚だ僅かのものなれば。

十四

『海賊よ、君の刑罰の名は定まれり。

されども、太守の心弱き時、妾は彼れを宥め得ん。

妾は君を死せしめじ—しかのみならず—今や君を救ふべし。

さは云へ此事—時日も—希望も—或は君の力なりとも、

能く爲し得るに非ざるよ。

されども凡て、妾は之れを能く爲し得、又た之れを爲さんとす。

たゞ僅か、一日君を生かすとの、其宣告は少なくとも、

之れを延ばすことを得ん。
若し此上に尙ほも又た、破滅を增すことありもせば—
無益に事を企てゝ、不運を吾等相方に來らすのみの其事
は、君と雖嫌ふべし。』

『然り眞に嫌ふなり—吾れの心は、其極度に興奮せるか、
或は餘りに下に落ち居れば、此上落つる恐れもなし。
おん身自身は、危難もて—
吾れは、敵し得ざりける、敵より遁るゝ希望もて、誘惑
はすことを爲す勿れ、
敵をば破り能はずて、吾れ卑怯にも遁れ得べきか。
仲間の者は死したるに、吾れのみ獨り生くべきか。

されど一人、吾れの記憶はまつはりて、
吾が眼には、彼女のかざりなき、其優さしさは浮び出づ。
吾が一生に踏みし道に、頼みと爲しゝは只だ是等—
吾船、吾劍、吾愛、吾神。
神は若き時に棄てたれば—今は神も吾れを棄てたり。
「人」はたゞ、吾れを下に押し下げんと、彼れの意志を行ふ
のみ。
吾れは、かの、失望の怯懦なる屈伏より、搾り取りたる
祈禱もて、
彼れの玉坐を、嘲弄するの心なし。
是れにて足れり—吾れ呼吸せり、堪ゆるを得—
吾が劍は—能く固く握りし手—

今や益なき其手より、たゝき落され、
吾れの船は沈みしか、或は捕獲されしならん。
然りと雖、たゞ吾愛―彼女の爲めにのみ、吾れの聲は眞心より天に上れり。
あゝグルナレー、おん身の姿、見る時まで―
げに彼女は、吾れを尙ほ、地に繫ぎ得る唯だ一つのものなりき―
〔若し此事を聽きもせば〕親切よりも以上なる、心を絕望せしむべく、
又た其形を、必ず涸へ枯れしめん。
たとひ他なる女等が、如何に美しかりしとも、吾眼は其れを、求めしことはあらざりき。

『君は、然らば、他に女を愛せるか―されど妾に取つてはそは何ぞや―
何事にてもあることなく―又たあること能はざり。
されど尙ほ―君は愛し玉へるなり―
しかして、あゝ、羨やましきは誠意もて、心と心と相たのみ、
妾の心爲せるが如く―覺束なき―さまよふ思ひの、
空しき影に打向ひ、と息つかざる人にこそ。』
『思ふに貴夫人、おん身の愛は、彼の人のものなるよ、
其人の爲めにとて、火焔の墓より、吾が此腕は、おん身

を救ひ出でしなれ。』

『妾の愛は、無情のザイドのものなりとか。あゝ—否—否
妾の愛に非ず—
然りと雖此心情—今は之れを爲さゞれども—
前には一度び、大に彼れの情欲を、迎へんことを力めたり—されば とて、之れ愛には非ざるなり。
妾は感じたり—妾は感ず—愛は自由と共に棲むものぞと。
妾は奴隷に過ぎざるなり—善く謂ひて、寵愛さるゝ奴隷にて、
彼れの榮華を分ち受け、いと幸福の見へあるのみ。
妾の心、屢々自ら問ひけらく、

「汝は果して愛せるか。」「否」と激しく答ふるなり。
あゝげに難きは、可愛き心を持ちつゞけ、
嫌ふ心のなきやうと、無益に力むることにこそ。
それにもまさり尚ほ難きは、厭ふ心を堪え忍び、
人に隱くし—恐くば、其處にあるなる他の人に、包み隱くすことにこそ。
彼れ妾の手を取るや、妾與へず逆はず—
脈は止まりもせざれども、又た速くもなることなく—たゞ靜かに冷たきのみ。
彼れ手を離すや、生命のあらぬ重りの如く、
嫌ふに足る程愛せざる、人の手より振り下りぬ。
彼れは接吻せりとても。此唇は、溫かき返へしもなさず。

冷たき記憶は、全身に震ふなり。
然り—妾若し、情の熱誠ありにせば、
妾の心は少なくとも、憎さを感じ得るやうに、變化したりしならんものを。
然るに尙ほ、彼れの出づるや悲しくあらず、其歸るや嬉しくもなし。
屢々與に在る時も—妾の心の其中には、さながら不在に異ならず。
時には思ひ廻らすこともあり—こは必ず有るべきなり—
其時妾恐るらく、是れより後は此事たゞに、嫌ふ心を起さんのみと。
妾は彼れの奴隷なれども—自重の心輕蔑して、

彼れの花嫁となることは、囚虜となるより惡しとなす。
あゝ願くば、彼れ胸中の、妾に溺るゝ愛息むか、
或は他なる女を寵愛して、妾に自由を與へかし、
されどこはこれ昨日ならば—妾はこと穩かに言ひ得しものを。
然り—妾若し、常に慣れざる愛裝ふとも、
捕虜の君よ、其は只君の鐵鎖をば、破らん爲めの計略—
君の手をもて救はれし、妾の生命の恩がへし—
妾の未だ知り得ざる、かゝる誠の愛うくる、
天が下には只一人の、君の愛する其人に、君を返へさん
其の爲めに、爲すことなりと知り玉へ。
さらばよ、夜は明けそめぬ、今は彼方にまかるべし、
事顯はるれば一大事—されど今日君、死を恐るゝの要あ

らじ。』

十五

鎖付きたる彼れの手を、女は胸に押し當てゝ、
頭を下げて禮を爲し、彼方にこそは去り行きぬ。
さもこれ、可愛き夢の消ゆるごと、音もなくして去りに
けり。

あゝ、かの女こゝにやありし、彼れは一人こゝにやある。
鐵鎖の上にきらめくは、如何なる珠の落ちにしものぞ。
あゝ、これ神聖き涙の珠—他人の苦痛を傷みしもの、
已に、神の御手にて磨かれて、いや輝きつ、いや清く、
直ちに情の玉山より、こぼれ出でにしものにこそ。

あゝ說き伏する强き力—危險なるまでの可愛らしさ—
げにこれ女性の眼に於ける、敵し難なき涙かな。
これやこれ、か弱き女性の扱ひ能ふ武器にして、
或は救ひ、或は從がへ—同時に槍の用を爲し、又た楯の
用を爲す。
こは恐るべし心せよ—餘りに深く、女性の悲哀を見つむ
る時は、
德義は退き、智慧は誤る。
クレオパトラの目に於ける、怯懦臆病の其涙、
世界を失はせ、英雄を敗北せしめしは如何にぞや。
されど三頭政治家の、やさしき一人の過は、咎めで之れ

を免るせかし。

これが爲めに幾多のものは、地のみに非ず、併せて天を
も失ひつ、
其靈魂を、人間永久の敵に渡し、
或放逸なる者の悲哀を助けん爲めにとて、己が心を封じ
去るなり。

十六

朝とはなりぬ—昨日の望はあらなくて、
彼れの變りし姿の上、日の光は刺し込みぬ。
夜の來らん其れまでに、彼れは如何になるべきぞ—
心もあらず感覺もなく、眼瞼を閉て横はれる彼れの上に、

烏はこゝに飛び來り、弔の翼はゞたく者となり—
日は沒り、夜露おく時は、
身は冷えはてゝ打しめり、硬くなりにし五體の周圍に、
霧は立てこめ、
凡ての物を新鮮かに、活きかへらする土地はしも、万の
物を活かせども、たゞ彼れのみは活かさぬか。

第三齣

"Come vedi-ancor non m'abbandona."—DANTE.

一*

*モレヤの丘に夕づく日、
しづかにいざよひ沈む時、また一としほに美しく、
*北の國にて見る如き、おぼろに照らすにあらずして、
活ける光はうら〳〵と、くもることなく輝きつ、
静まりなげる海の上に、黄なる光線を射放てば、
緑の海面、之れに映じて、燦たる金波をたゞよはす。
古より、音に名に高き*アイギナの岩、*イドラの島には、
歡喜の神は、その別れの微笑をそゝぎ、

此神の祭壇は、今は昔の如く神聖にはあらざれど、
尙ほ其領土の上にさすらひて、喜びて照りかゞやき、
諸々の山の影は下り來て、
汝の光榮ある、降伏せざりし*サラミスの灣を接吻す。
ひろく張りたる蒼空は、
濃紫に染めなして、此神の陶然たる容貌に接し、
其頂にたなびかせたる、やさしき色は、
此神の樂しげなる道を標付けて、天の色どりを受け、
遂に、陸よりも海よりも、影たそがれて來りなば、
太陽の神、*デルフォイの岩戸の後ろに入りまして、彼れの
宮殿にねむり玉ふ。

あゝアテーナイよ。汝の國の最*も賢明なる人が、此神の
終りの時刻見たる時、
此くの如き夕には、此神は其悽愴き白き光を放つなり。
あゝ汝の善良なる子等は、其殺害されたる聖人の、最後
の日をば終りにし、
此神の、別れの光如何にか見たる。
未だなり—未だなり—太陽は尙ほ丘の上にとゞまりて—
いとも貴とき、別れの時は尙さすらへり。
されども悲しき者の其眼には、其れが光りは悲しく見え、
嬉れしかりにし色どりの、山も今や暗黯として、
未だ曾て、*フォイボスの神の厭ひ嫌ひしこともなき、
美しかりし其土地も、彼れ陰欝を注ぎしかと思はれぬ。

然りと雖も其未だ*キタイローンの頂に入らざるの前、
不幸の毒杯は飲みほされ、其靈魂は去り行きぬ。
あゝ此靈魂―之れぞ之れ、死を恐れ或は遁るゝことを却
ぞけつ―
餘人の企て及ばざる、生き死なせし靈魂なる。

然りと雖今や*ヒメットスの山より、平原に至るまで、
夜の女王は、其靜寂なる統治を宣べ、
暴風の先驅たる、陰欝なる煙霧も、
此女王の美なる顏容隱くすことなく、又た其輝く姿を蔽
ふことなし。
月影清く澄む時は、軒の蛇腹はおぼろにかゞやき、

白き柱は、喜ばしげの光を迎へ、
四邊に顫える光を放ち、
此女王の記標〔なる三ヶ月〕は、尖塔の頂にかゞやけり。
橄欖の森は影ほの暗く、彼方此方に散在し、
溫和なる*ケーフィソスは、細さやかなる流れを其間に注ぎ、
神聖き禮拜堂の傍の悲しき檜の木、
愉快なる凉み屋敷の輝く樓、
神聖き寂けき其内に、黑く、又た薄暗く、
*テーセウスの神殿近く淋しげに、立てる彼處の棕梠の樹―
皆な盡く、色、樣々に染めなされ、人の目を引き止むる
なり―
何氣もなくて不注意に、若しも是等を見過ごさば、其人

こそは盲目なれ、

今や再び*アイガイの海は、遙かに音も響かずなり、
疲れし胸を元行の戰より眠せつけて、
波は再びやさしき色に染めなされ、
碧石及び黄金の長き列をば陳べ展き、
此くもやさしき大洋の、げにほゝゑめる其内に、
顔を顰めし如きなる、離れ小島の數あまた、其影そへて
見するなり。

二

こは吾が本題には非ざるよ—如何なれば吾思想、此くは

汝に向へるぞも。

あゝ誰か、汝の國の其海を、見過ごし得る者あるべきぞ。
話しはたとひ何なりとも、此くまで凡てに魔術ある、
汝の名をば誰かまた、心を留めであり得べき。
げに美しきアテーナイ、汝の土地の入り日を視たるもの
にして、
汝の夕の面ざしを、忘れ能ふは誰れなるぞ。
年月如何に經たりとも、土地は如何に隔つとも、心は魔
術に縛られて、
*キュクラデスの群島の、内より放たれ得ざる彼れ—には
らず。
又此頌賛の辭は、彼れの歌には緣なしとしも思はれず—

彼れの歌へる海賊島は、前には汝の版圖なりき—
又た其自由と共に、再び汝の有たることぞ願はしき。

三

太陽は沒したり—夜よりも愈暗く
其斜照と共に、物見の山なるメドラの胸に沒したり。
第三日の太陽は來り、又た去れり。
其れと共に彼れは歸らず、報知も送らず—不實の者よ。
風は聊か之れ有れど、日和は尙ほも穩和かに、暴風の模
樣更になく。
アンセルモの船は昨夜歸帆したれども、
海上出逢はず相識らずとは、たゞ其消息。

あゝ若しコンラード、此一船を待ち合はせたらんには、
激しき事は、今と同じく激しきも、話は遙か、其趣を變
へしならん。

夜風さわやかに吹き亘りぬ—メドラは其日ひねもす、
たゞたゞ、望みをかけし檣の、今や見ゆると眺めくらしぬ。
メドラは悲しくたゞ一人、高きにのぼり坐し居たるが、
今やこれに堪えかねて、中夜に室をぬけ出でゝ、海邊の
方に足はこび、
彼方此方にさまよひて、波の白玉飛び來り、
屢々裳末に打ち當り、打當りては引き退るも、心にかけ
ず—

見向きもなさず、感じもなさず—避けんともせず。
寒しと思ふこともなし—これ、惡寒、彼女の胸の中に有
ればなり。
遂には疑ひまどふ其中より、此くも確定の心を生じ—
コンラードの、生命失ひ、感覺去れる、姿を思ひ浮べたり。
終りのはてには—悲しくも、破れはてたる、一つの短艇
はたゞよひ着きぬ。
乘り組みの者供は、始めに探がし求めたる其者を、今や
始めて認めたり。
其或ものは血にまみれ—凡て憐れの極にして—是等と雖
數少く—

如何に爲してや遁れたる、彼等殆ど知ることなく—たゞ
是れ、彼等の知る所。
彼等默して面見合はせ、互に、悲しき推測を、讓り
コンラードの不運に付いて、
て待てる如きなり。
何事か、彼等言はんと思へども、
メドラの耳に其言葉を、信じて云ふを憚かる如し。
メドラは遂に看破せり—されども未だ沈まず、又たふる
へず—
此くも悲しく、此くも亦、賴りあらざる運命に、
又た其柔和、美麗なる、姿の中に今も尙ほ、高き感情存
在して、

其精力の現はるゝ、其時までは、殆ど無かりし者の如く、
尙ほ希望の存せる內は、此精力はいとも柔和に、又たか
き亂れ、又泣けど—
万事一旦去るときは—其柔和は死せしには非ざれども—
寢むりたり。
寢れる內に、かの精力は、起き上りて曰ひけらく
『今や愛すべきものあらざれば、恐るべきもの更になし』と。
實に之れ、自然以上の力にて、宛も精神の激昂が、
いとも高度の發熱より、烈火の力を生じ出だすが如きなり。
『汝等無言なり—汝等の言ふ所、妾聞かんことを求めず—
語る勿れ—言ふ勿れ—妾は之れをよく知れり、

されども妾の問ひたきこと—妾が口は其を言ふことを殆
ど否みぬ。
速に汝等答へよ—妾に告げよ、彼れは何處に死せるかを』
『奧方よ、吾等全く知らざるなり—辛くも一命もて遁れし
のみ。
されどもこゝに、コンラードは死せずと言ふの一人あり、
彼れコンラードの捕虜となりて、血にまみれたりとは云へ
ど、而も生けるを見たりと言へり。』
メドラ其餘を聽かず—如何にするとも其甲斐なく、
拒み逆らふ其時まで—凡ての脈は動悸して—万感交々起
りつゝ、

陰欝なる精神は、直に右等の言語を打消し、
よろめき―倒れ―其感覺を失へり。
若しこのまゝになし置かば、寄せ來る波は、他の墓より
彼女を奪ひ去りしのみならん。
されども其手はあらくむくつけきも、眼には涙を湛えつゝ、
あはれむ心の爲し能ふ、急場の助けに力を盡くし、
死せるが如き其頰に、海の水をば注ぎかけ、
起こしつ、氣付けつ、さゝへつゝ―漸く生命を引き返し、
メドラの侍女を呼び起こし、
氣絶爲したる其姿を、彼等は視つめ悲しみつゝ、老女達
にあとを托して、
アンセルモの窟屋に至り、

短き勝利の時間に比べて―面白からざる長き話しの報告
をぞ爲したりける。

四

荒き評議の席上は、
贖償、救助、或は復讎せんとの思想もて、言語熱して異
常となれど、
安を偷み、遁れんなどと云ふものなく、
凡ての物事依然として、こゝに止まり、コンラードの精
神を呼吸して、以つて失望を禁ぜるなり。
彼れの運命、よしや如何あらんとも、彼れ薫陶し、彼れ
導きし、勇氣の胸の水夫等は

活きたるまゝに彼れを救ふか、死したる彼れを鎮むるか、
何れか必ず之れを爲さん。
彼れの敵こそ不幸なれ。尙ほ少數は生き殘れり、
其精神の確實なる、眞つその如く、其行爲や又た勇敢。

五

婦人寮の秘密の一室、尙ほも捕虜の處分を考へ、
嚴しき大守は坐せるなり。
彼れの思想は、戀と敵とに交々移り、
今ま、グルナレーを思ふとすれば、又た忽ちに、コンラードの牢獄を考へぬ。
可愛き奴隷は、彼れの足下に膝づき、

彼れの面を見上げつゝ—彼れの心の暗黑を、宥めんものと、
鈴の如きの黑き眼は、たゞ同情を求めつゝ、
憂含める眼なざしを、送りて彼を見つめたり。
然るに彼れは、己が念珠を見る如く、其目をこれに向くれども、
其內心は捕虜の血を、流さんことを描けるよ。
「グルナレー言ひけらく」、『太守の君よ君は軍に勝ち玉ひ、
「勝利」の神は君の冠にやどり玉ふ。
コンラードは捕虜となり、其他のものは斃れたり。
彼れの宣告旣に定まり—彼れは死すべし—
彼れの受べき運命は、善く報はれしものなれども—我君の惡み玉ふの値なし。

意ふに暫く放釋して、
彼れの凡ての財寶もて、身を贖はすも、亦これ愚かに賣
れるものにはあらじ。
報告に從へば、海賊の蓄積せる財貨は甚だ多しと—
太守の君の、又た是れが主たることこそ望ましけれ。
然るに彼れ、此不幸の衝突に打破られ、弱められ—
監視され—追尾さるれば—彼れや容易の獲物に過ぎず。
又た此く一度破りし上は—其敗殘のものどもは、
彼等の財貨を積み乘せて、他の安全の濱を求めて、其處
に遁れ去らんのみ。』

『グルナレーよ—彼れの鮮血の一滴毎に、

寶石は、スタンブルの王冠の如く、假令豐かに捧げらる
るとも、
彼れの毛髮の一條毎に、哀願しつゝ輝くとも、
重大なる金鑛は、假令、哀願しつゝ輝くとも、
又た假令、凡て吾がアラビアの、古譚(むかしばなし)の語りつ夢みつす
る如き、無量の富こゝにありとも—
其黃金も、彼れを贖ふ能はざり。
此物一時間と雖、今や彼れを贖ふ能はず。
されども彼れは、我權力にて鐵鎖もて、縛され居るを吾
れ知れり。
吾れ其の復讎に渴して、
如何にせば最も長く苦悶せしめ、最も遲く死せしめ得る

かを考へ居るなり。』

『否とよ、ザイドの君、妾は餘りに正當に、輕減の惠みの情に動かされて、君の怒りを抑へんと、思ふものには非ざるなり。妾の心は君の爲め、彼れの富をば盡く、獲んとするにてありしのみ。此くて彼れ、たとひ放釋さるゝとも、決して自由に非ざるなり、既に力を失ひつ、其勢力も其徒黨も、殆ど半刈り去られば、若し彼れを捕へんとせば、たゞ吾君の一命令の下にあり。』

『彼れを捕へ能ふべし—故に既に我物なる彼れに一日を與へよとか。我が敵を救へよと—何人の諫めにて—これおん身の諫めのみ。

美しき懇願者よ—おん身及び、女性のみを助けたる、*此不信者の、情の所作に報ひんとの、おん身の德ある恩謝には—

褒美は善きか惡しきか其は問はず—

吾れは感謝と稱賛とを、共に負へるや疑なし—

されど聽け—やさしきおん身の其耳に、告げ聽かすべきことぞある—

女よ、吾れは、おん身を信用せざるなり、

おん身の語る一言一語は、凡て「猜疑」の聽きし所に、其眞なるを捺印せり、

彼れの腕に抱かれて、彼方なる婦人寮より、猛火の内を通り抜け—

否な寧ろ—おん身は彼れと共々に、出奔せんとさまよひ居りしと言ふべきか。

之れに答ふる要あらじ—罪あるおん身の其頰は、早や赤らみて自白せり。

美しき貴女、おん身自ら省て、よく〳〵注意召されかし、此くも注意を要するは、啻に彼れの生命のみには非るよ。其他の言葉及び—否—此他吾れは要むることなし。

彼れがおん身を火中より、救ひ出だしゝ其時は咀はるべ

きかな。

寧ろ〔燒け死なば〕宜しかりしに—されども—否—其時吾は情人の、悲しみをもておん身を傷みぬ。

されども今まや、おん身に注意を促がす者は、おん身の夫なるぞ—僞り者よ。

おん身は知るか—吾れはおん身の放逸なる、翼を斷ち切り得ることを。

たゞに言語のみをもて、吾れは怒るに非ざるなり。

おん身は自ら省みよ—おん身自身の僞りは安全なりと思ふ勿れ。』

彼れ起ち上れり—目には忿怒の情を現はし、其別れの言

葉には、脅迫の意を含ませて
徐々として、嚴格にこゝより去れり。
あゝ此の、女性の首領、毫も恐るゝ所なく—
恐怒も屈伏せしむる能はず、脅迫も服從せしむる能はず。
あゝ、グルナレー、彼れはおん身の心情の
やさしき時には何をか感じ、怒れる時には何をか敢て爲
し得るかを、聊かだにも思はざり。
彼れ〔ザイド〕の疑念は惡しきが如く見ゆれども—
其の哀憐の同情は、如何なる深き根底より、生ぜしもの
かは、彼女未だ之れを知らざるなり—
彼女は奴隷なり—或はかゝる所より、
名のみはたとひ異るも、捕虜たるものは同情を、求め得

ることあり得べし。
然りと雖、尙ほ半は意識なく—彼れの怨怒を意に介せず、
彼女、再び危險の途を試みしも、
彼れは怒りて、再び之れを拒み斥け、
遂には婦女子の不幸の源なる、思想の爭ひを起したり。

六

其間—長く、物思はしく、退屈なる、而も同じく、晝と
夜とは來去せり—
此疑惑と恐懼との、げに恐るべき時間中、
何時にても死にたるよりも尙ほ惡しく、彼れの運命定め
得る時—

戸の側に、人の足音する毎に
入り來りて、首を斷るなる其斧と、死刑臺の待てる所に、
彼れを連れ行き得るの時—
彼の精神は、能く其恐怖を壓伏せり。
耳にひゞく如何なる聲も、
彼れの聽き得る最後のものたり得るの時—
彼れ能く恐怖を壓伏して—
嚴たる高き精神は、死するに適せぬ者たるを、耻づるこ
とをば證明せり。
精神素より疲勞せり—恐くば衰弱せり—
されども能く自若として、以前凡てのものよりも、尙ほ
慘憺たる、其紛爭を堪え忍べり—

戰鬪の熱烈も、疾風の强暴も、
よく畏縮せしめ得る、無氣力なる一思想だも殆ど殘こす
ことはなし。
然りと雖鐵鎖以て、寂莫中に繫がれて、
種々に變る心地を感じて、其れが獲物となれるを歎じ、
汝自ら、己が胸中を反省て、
消すこと難き過失と、將來來べき運命とを、獨りつくづ
く默想するに—
後者を避けて、前者を改め正さんは、其時已に晩くして—
汝の終りに急ぐなる、其時間を算ふるに、
力を添へて、勵ます友もあることなく、
死は却つて、汝に取つて宜しきことを、語り聽かするも

のもなく—
敵は四周に、容易に虚欺を揑造して、
生命の最後の光景を、汚がすに誹謗を以てするあり—
汝の前には責苦あり、こは精神の敢て恐れぬ事なれど、
尙ほ、畏縮する肉體は、果して之れに堪え得るかの、疑
なきに非ざるなり—
然りと雖、一度泣くことありもせば、
汝の最も貴びて、只管得んと要むなる、勇氣の稱賛に對
しては、耻づべきことゝ深く感ぜり。
汝は下界の生命を棄て、
天上の生命は、神聖なる愛の、親切なる專有者等に拒絶
せられ—

剩さへ、かの疑はしき極樂よりも—
地上に於ける、汝の希望の天國たる—最も汝の愛せる者
は、汝より引き離されぬ。
此くの如き種々の思想は、かの海賊が耐え忍びて、
死苦に超過れる、悲痛をば制御せざるを得ざるなり。
此くて是等を耐えたる彼は—果して善く利益したるか、
否か、
何となれば死せざることは、尙ほ或物なればなり。

七

第一日も過ぎ去れり—彼れグルナレーを見ざりしなり—
第二日も、第三日も、尙ほ彼女こゝに來らず。

されど其の保證したりし言の葉は、彼女の美の魔力、よく其を實行せしならん。

若し夫れ然らざらんには、彼れは他日の太陽を見ざるべかりしなればなり。

第四日の日も暮れて、

暴風と暗黑とは、結合したる勢もて、夜と共に來りけり。

あゝ彼れ如何に怒濤の音をきゝしならん、

これ今まで嘗て、睡眠の上に、此くは破裂せざりし所。

こゝに己れと同體なる、元素の怒號に喚び起こされて、

彼れの荒き精神は、荒き願望を生じたり。

數々彼れは、飛ぶが如きの波濤に乘り出で、

又た快速力を與ふなる、其亂暴を愛せしが、

今まや怒濤の突激は、彼れの耳にひゞくなり—

これ彼れの舊知の音—あゝ徒らに近きかな。

强風聲高く大空に鳴り、

これに倍して、般々たる雷雲を、彼れの樓塔の上に震ひ、

電光を窓の格子に閃かせり。

實にこれ中夜燦たる星よりも、彼れに取つては一層親密

思あり。

おぼろに閃く格子の下に、彼れ其鐵鎖を曳き摺り行きて、

此危險は、無益の證明と、ならざれかしと希望せり。

彼れ鎖付きたる手を捧げて、天に向つて禱るらく、

願くば。憐れみの電光一閃して。其が作りたる形に一擊

を加へよと—

彼れの剛鐵の其鎖と、不敬神なる祈禱とは、互に同じく
相引きて—
暴風彼方に吹き去りて、彼れに打撃を加へもせず。
其轟きは次第々々に微かとなり—遂には止みて—彼れは
獨り寂寥を感じつゝ、
宛も實意あらざる朋友が、彼れの煩悶を擯斥したる如き
なり、

八

中夜も過ぎぬ。堅固なる戸の外に
輕き歩みの足音して—一たび止まり—又た動きぬ、
軋しれる錠と、氣味惡しき鍵とは、徐ろに廻りたり。

こはこれ彼れの心に預期したる—美麗なる彼女なり。
彼女の罪は如何ならんとも、彼れに取つては守護の聖者、
隱者と雖希望として、描き能ふの美人なり。
されども前に彼女の、獄を見舞ひし時以來、姿はいたく
變りはて、
其頰愈々青白く、身體益々衰ろへたり。
彼女、其黑き目の一瞥を、彼れに投じぬ、
目は彼女の言葉より、先づ、其意味を語りたり—『君は死
なではかなはざり。
然り、君は死なではかなはざり—されどもこゝに、たゞ
一つの手段あり、
若しも責苦は、一層惡しきに非ざらば—こはこれ最後の

―最も悪しきものなるよ。』

『貴き夫人よ、吾れは何者をも望むなく、
吾口は、前に言ひし所を言はんのみ―コンラードは依然
として變るなし。
おん身はなど。此破法者の生命を助け、
又た吾が受くるに、相當せる宣告を、變ぜんことを求む
るぞも。
多くの無法の行もて、吾れはザイドの復讎の、報は十分
儲けたり―
又たこれ此處に吾れ一人、然るのみには非ざるよ。』
『何故妾、之れを求むと云ふか、其理由たる―あゝ―

君は、奴隷の狀態よりも、尙ほ〳〵惡しき其事より、妾
の生命を救はざりしか。
何故妾、之れを求むと云ふか―不幸は君を盲目にし、
女性の心の、好める作用見ざらしめしか。
あかして妾は、夫れを言はざる可からざるか―
妾の心は、女性の感ずる凡てに叛けど、妾は之れを告げ
ざらん―
これ、君の罪惡あるに拘はらず、妾の心は感動したるを
以つてなり―
妾は君を恐れたり、感謝したり、憐れみたり、狂したり、
愛したり。
答ふる勿れ、再び君の身の上語る勿れ。

君は他なる女を愛し、妾は空しく戀ふるのみ。
彼の女、たとひ妾の胸の如く愛せりとも、又た妾よりも
美しとも、
妾は敢て彼女の能く爲し得ざる、危難の中に突進せり。
君の心は若し彼女に、眞に可愛きならんには、
妾若し君の妻にてあらんには、さびしく君はたゞ一人、
こゝにあることあらざらん。
海賊の妻たるものが、其夫を漂泊に一任するとは。
かゝる溫和の女子たるもの、如何にしてか家を治めん。
されども今は語るを止めよ—君と妾の頭の上には
鋭き劍は、一縷の糸に懸れるなり。
若し君尙ほも勇氣あり、自由たらんと欲しなば

此懷劍を受け取りて—起ちて妾に從ひ玉へ』
『然り、鐵鎖のまゝにて。此くの如きの飾もて、
寢れる者の頭を越えて、徐ろに歩み行かんかな。
おん身は忘れしならん—こは果して出奔の衣裝なるか、
又た此道具は、寧ろ出奔に適せるか。』
『誤り疑ふ海賊よ。妾は已に、守衛は心服せしめあり。
謀反の機會は已に熟し、彼等はたゞに貪欲に、報酬を得
んと爲せるのみ、
妾の一言、直に君の鐵鎖を解かん。
何等の援助あるなくして、如何でか妾、こゝに止まり得

べきやは。
君に逢ひたる此の方は、事を爲すべき時を速めぬ。
若し何事か罪惡なることありとせば、そは君が爲めの犯罪のみ。
犯罪—否、サイドの罪惡を罰するは、毫も罪には非ざるなり。
コンラードよ、かの惡むべき暴君—彼れは殺さで止む可からず。
君は震へ玉へるを妾は見ぬ。されども妾の心は變りたり—妾の心は害されたり、賤まれたり、侮辱されたり、是は復讎を要するなり—
今まで、妾の心情に卑しみし、其事につき責め詰られ—

たとひ苛酷の束縛に、繫がるゝにも拘はらず、妾は餘りに貞實を盡くし過ぎぬ。
然り、微笑せり—されども彼れは烈しく笑ふ理由あらず。
其の時までは、妾叛逆の意志なく、君も左までに、戀しきこともあらざりき。
然るに彼れは其れを言ひ—且つ十分に嫉妬せり—
或は人を怒らせつ、また或は誘惑し、以つて叛逆せしむる暴君等は、
己が怒れる其口の、前言したる運命に、遭ふは素より當然なり。
妾は彼れを愛せざり—彼れたゞ聊か高價にて、妾を買ひ取りたりしのみ。

其の時此の方、彼れの買ふこと得ざる心情も、妾と與に
來りしなり。
妾はつぶやくなきの奴隷なりき—
彼れ曰ひけらく、彼れの救ひに拘はらず、妾は君と走れ
りと。
此事の、實ならざるは君知れり—されども此かる卜筮者
は哀れなれかし、
彼等の言語は凌辱が、實ならしむる前兆ぞ。
妾は君の死刑をば、延期せんやう願ひしも、彼れは之れ
を許るさゞり。
飛び行く暫時の此恩典、
これぞ君の生命と、併せて妾の絶望とに、更に新の苦悶

をば、與へん爲めの準備なる。
妾自身の生命とても、同じく脅かされたるよ。
されども彼れは、妾の愛に溺れ居て、尙ほ其意志を充た
さんと、妾を生かし置くべきも、
妾の色香失せ去りて、妾に厭きの來る時は、
袋の口は開きあり、彼處に波は逆か卷けり。
何ぞや、さらは、妾は愛に溺れし彼の人の、玩弄物とな
りはてゝ、
其色艶の消え去るまで、使ひ耗らさるべきなるか。
妾は君を見てしより—君をば愛し—凡てを君に負へるな
り—
たゞ此奴隷が如何ばかり、恩義に感じ居れるかを、示め

さん爲めに、妾は君を救ふべし。
されど彼れ若し、妾の名譽と生命に、此く脅迫を加へざりせば—
(口論中に斷言したる彼れの誓ひ、彼れは必ず實行せん)—
妾は尙ほ君を救ふも、太守の生命は助くるならんを。
今や妾は全く君のものなれば、如何なることも覺悟せり。
君は妾を愛せず、知らず—若し君知らば只だ最も惡しきことをのみ。
あゝ、悲しむべし、此の愛と—彼の憎さ—これぞ事の始めなる—
あゝ、君若し妾の眞理をためし得ば、君は驚くともなく、
又たは東洋人の胸中に、輝く火をば恐れざらん。

之れぞこれ、君を安全に導く光—
今其光、港の內なる、*マイナ人の船をば指しぬ。
されど吾等の、通らでかなはぬ一室の內、
其處に暴虐のザイドは寢ぬ—彼れを覺まさば惡しかりなん。』
『あゝ、グルナレー、グルナレー—吾れ今に至るまで
此くまで、拙き運命と、此くまで枯落の名譽とを、感ぜしことはあらざりき。
ザイドは吾が敵。無慈悲の手もて、吾徒を地上に掃蕩せしも、
而も彼れは公明正大。
されば こそ吾れ亦軍船もてこゝに來り、

吾れを撃たんとせる者を、吾れ亦劍もて撃たんとせり。
此くの如きは吾が武器なり—懷劍にては非ざるなり。
苟も女性の生命を救はん者は、寢れる者の生命を求めず。
貴き夫人よ、おん身の生命を、吾が喜びて救ひしは—之
れが爲めには非ざりき。
其恩惠を吾れはしも、誤り示めし、ものなりと、吾れに
思はすこと勿れ。
さらばおん身と別るべし—おん身の胸には今一層の平和
あれ。
夜は早くも過き行きぬ、地上に於ける、吾れの休みの終
りなり。』

『休みか、休みか。日出でなば君の筋肉は震動し、
君の五體は用意の柱に捩ぢられん。
其命令を妾は聽き—又た見たり—妾は其を見ることあら
ざらん—
君若し死するならんには、妾も與に死すべけん。
妾の生命も、戀愛も又た憎みも—凡て地上のもの皆は、
たゞ此一擧にかゝれるなり—海賊よ。たゞこれ一擊。
是れを爲さでは出奔は無益のみ。必ず爲すなる彼れの追
手は、如何で遁るゝことを得ん。
妾の受けし害惡は酬ひもなさず、妾の若き年月は、辱し
めを被りつゝ、長く長く年たちぬ。
一擊以つて吾等の後の患を斷たん。

されど君には懐剣は、太刀の如くに適せざらん。
女の腕の確かさを、妾はためしこゝろみん。
守衛等は已に妾手なつけあり—またゝく内に事すまん—
海賊の君。吾等安けく再會するか、然らざれば此れ限り。
若しもかよわき妾の腕、仕終せざりし其時は、
君の斷頭臺上に、妾の屍骸の布の上に、朝の雲はさまよ
はん。

九

彼女彼方に向き、彼れの答ふる其前に早やくも姿は消へ
失せぬ。
されども彼れは熱心に、遙かにまでも見送れり。

彼れ其能くし得る限り、己を縛せる鐵鎖を手繰り、
長さを縮めて、音を立たざるやうにとなし、
今や棒も閂も、歩を遮る物なければ、
鎖付きたる其手足の、許るさん限り速かに、後の方より
追ひ行きぬ。
暗さは暗し、曲りつ折れつ、こゝ行かば何處行くやも彼
れ知らず、
燈火もなく守衛もなし。
折しも彼れはほの暗き、一點の火を認めたり—あまりに
弱くかすかにて、
其方に向つて行くべきか、又は此火を避くべきか。
たゞ偶然の、導くまゝに進み行けば—

朝の空氣の其の如く、彼れの額にさわやかさを、いとも
豐かに感じたり。
彼れは廣き廊下に達しぬ。
仰げば夜の終りの星も、晴れたる空もかゞやけど、
是等は敢て、彼れは心に留めざりき。
又た他の光の一室より、閃めき來るを見たりしかば、
彼れは其方に動き行きぬ。
僅かに閉ざゝし其戸びらは、内なる光を示めすのみ、其
他何をも示めさゞりしが、
一つの形は、急ぎ足もて出て來れり。
踏み留まりつ、ふり向きつ、又た留まれり—これぞ遂に
彼女。

手には懐劍持てるなく、又た何事も惡行のしるしなし—
『難有し、心柔ぎにけんかも—彼女は殺すと能はざりしよ。』
再び見れば、彼女の目の猛烈さは、
突然其日よりものすごき相を呈せり。
彼女は立止まり—其顏及び美麗なる、胸を殆ど蔽ひたる、
さばけし黑髪、後ろの方にかきやれり。
さも之れ今しも其頭は
疑念か或は恐怖かの、目的物の其上に、むつぶき居たる
ものゝ如し。
さばけし髪は額の上に集まりしも—心も付かず、忘れ去
りぬ—
其急ぎたる手に殘れるは—たゞこれ小き一斑點—

彼れの見たるは其色のみ—否む可からず—
あゝ些小なりとも、罪の確たる證據なり—これ血なり。

十

彼れ戰爭は之れを見たり—
豫め示めされたる、宣告受けし罪科に對し、定めの苦痛
は、泰然と、彼れは之れを忍びたり。
彼れは誘惑されたるともあり、折檻されたるともあり、
又た其腕を縛れる鐵鎖は、尙ほ何時までも其まゝなるも
堪へ得るなり。
然りと雖戰爭にも、捕獲にも、痛恨にも、
此紫色(むらさきいろ)の汚點を見し時、凡ての血の氷れる如く、

彼れ一切の感情の、其中心の力より、
此く蔓延せる各々の血管が、戰慄震蕩したること、未だ
嘗て之れ有らず。
其血の斑點、其些少—されども罪惡のしるしの線は、彼
女の頰より一切の美を消滅せしめぬ。
彼れ血を見たり、又た自若として見るを得れども—
其は戰爭にて流しゝもの、又は男子の手にて流しゝもの。

十一

『仕遂(しと)げたり—彼れは殆ど目さめたれども—仕遂げたり。
海賊よ。彼れは死したり—辛くも君は獲たるなり。
凡ての言葉今は益なし—いざ、いざ。

船は波に搖り動けり―もはや夜は明にけり。
少數の者は味方に得たり、今は全く吾勝なり、
是等の者は、生き殘れる君の手下に合併せん。
吾等一旦、こゝなる惡き磯邊を去らば、
妾の聲は、直に妾の手をば辯證せん。

十二

彼女手を拍てば、其家來たるグレシア人、ムール人等は、
出奔の準備して廊下より群がり出て、
靜かに、而も速かに低頭して、彼れの鎖を解き去れり。
こゝに再び、彼れの四體は自由となりて、山吹きすさぶ
風の如し。

されども重き心には、切なる、悲しみ其坐を占めて、
宛も鐵の分銅を、積み重ねたる思あり。
一と言葉だに出だすなく、彼女は所作をもて、家來のも
のに指圖せば、
戸は打ち開きて、濱邊に出づる、秘密の通ひ路現はれぬ。
今や市街は後ろにあり―彼等は急ぎ、
黃なる渚の、喜び踊れる波にぞ着きぬ。
コンラードは、彼女の手招くまゝに從ひつゝ、
今や或は救はるゝとも、或は陷れらるゝも、彼れは之を
問ふことなく、
如何に抵抗したりとも、其益なきは、
宛もザイド尙ほ活きて、忿怒の下しゝ宣告の、刑の施行

を、見つゝあるが如きなり。

十三

人は乘り組み、帆は揚げられ、微風は輕く吹き來れり。
コンラードの、前の記憶を、回想せしむる如何ばかりぞ。
前きに彼れの、碇泊したる岬の山が、其巨大なる形を起こせる所まで。
彼れ默想に沈みたり。
あゝ、かの不運の夜以來、時日はたとひ短しとも、
恐怖、悲哀、罪惡等の、時代を凡て經歷せり。
かなたの岬の遠き影が、帆柱の上に顔顰むるや、
彼れ其面を蔽ひたり、こゝ過ぎ去るや、彼れ悲しめり。

彼れ、ゴンサルヲ、及び徒黨のもの、
一時の勝利、及び失敗等—凡て之れを想ひ起こし、
又た其遙かに孤閨を守れる、妻の身の上思ひ出で、
首を回らし、グルナレーを顧みぬ—かの殺人者を。

十四

彼女はつくゞと、彼れの顔色を視まもり居たるが、
其冷遇の容貌と、其嫌惡の態度とは、今や之れに得堪え
ずなりぬ。
彼の女の其眼には、本來ならざる、不思議なる、かのす
ごさは、
涙の中に消えしかど、其れを流がすも乾かすも、今や其

時後れたり。

彼女、彼れの傍に膝まづき、其手を取りて胸に推し當て

〔云ひけらく〕

『たとひ神は惡むとも、君は必ず赦るしまさん。

されども妾の暗きかの行、之れに付いて君は如何ん。

咎めんと思はゞ咎めませ—されども未—今は妾を助けてよ。

妾は君の見玉へる、如きのものには非ざるよ—此恐ろし

き夜は實に、

妾の腦は亂れしも—未だ全く狂しはせず。

若し妾、君を愛するなかりせば、妾の罪は少なきも、

君は妾を嫌はんと、生き玉ふことなかりけめ—嫌はんと

思はゞ—嫌ひませ。』

十五

彼女、彼れの思想を詰れるも、彼女の言葉よりも、彼れ

の思想は。一層自ら責むるなり—

彼れの情なき其所作は、企で爲せしにあらざるも、

されど一切言葉なく、深く、暗く、又た言ひ難く、

寂けき胸の密室の内、其等の思想は血にむせべり。

されども船は進み行き、風穏かに、大浪荒るゝともなく、

綠の波は後推し行きて、船の艫にたはむれ躍れり。

見渡せば、水平遙か、かすかに一點—

一點—檣—白帆—次には武裝の甲板現はる。

彼等の乘れる小き船は、かの船の見張の人々之れを認め、

廣き帆は上よりの風を迎へ、
威風堂々として壓し近づけり。
舳前には速力あり、列べ連ねし大砲には威光あり、
時に火光一閃して―砲彈船首をかすめ超え、
何等の害をも與ふるなく、鳴りつゝ來り、音立てゝ水中
深くに沈み入れり。
鋭敏なるコンラード、忽ち默念より起ち上り、
久しく、永く絶えて見ざりし喜悅の色は、其眼に現はれ
〔云ひけらく〕
『こは吾が船―吾が血染色の旗なるよ―再び―再び―
吾れ未だ海上の運盡きざるなり。』
彼等信號を認めて、其挨拶に答へつゝ、

直に短艇をつり卸ろし、帆を緩めぬ。
『こはコンラードなり、コンラードなり』と、其甲板より叫
びつゝ、
如何なる義務も命令も、此大歡喜を制止得ず、
彼等は淡泊快活に、いとも得意のおもゝちして、
再び彼れが其船の舷に上るをながめ見つ、
微笑は凡て、彼等の粗剛き顏を和げ。
彼等の腕は、武骨の抱きを、自らたしなむことをせず。
彼れ亦半ば、其危難と、又た敗北とを打忘れ
首領の爲し得る其限り、彼等の歡迎に答へつゝ、
いと丁重に、アンセルモと握手爲し、
尙ほも捷利し、號令し、得べきことを感じたり。

十六

是等の挨拶終りたり。されど歡び溢るゝ感情も、敵に一擊加へずして、彼れを此方に取り返へすは實に無念と感じたり。

彼等實は復讎の、其準備して船出せしもの—彼等若し、一婦人の其手腕、能く、彼女の爲せし其事を、爲し遂げたるを知りにせば、

さば彼女は、今や彼等の女王にて—彼等の勇往邁進は、傲慢なるコンラードよりも、尙ほも決行果敢なり。

問ふが如きの微笑もて、訝かる如きおもゝちして、

彼等互にさゝやきつ、グルナレーを見つめたり。同時に女性以上たり又た女性以下にして、

鮮血も恐れぬ彼女も、彼等の注視に當惑し、力なき、願ふが如き眼なざしを、コンラードの方に向け、面蔽を取去りて、言葉はなくて、コンラードの側に立ち、いとしとやかに其手をば、胸の上に組み合はせり—其胸や—これ、コンラードを助けしも—身は運命に打ち任せ、其安心を棄てしもの。

たとひ狂氣よりも尙ほ惡しく、或は愛にも惡みにも、善にも惡にも極端に、其胸充たし得たりしとも、

多くの罪の其中の最も惡しき罪といへど、尙ほかれを女

として、殘したり。

十七

コンラード之れに氣付き、又た感ぜり、
されどもあゝ、彼女の不幸をば、假令悲しみたりと云へ、
其行を惡むこと、同じく之れを減じ得るか。
彼女の爲しゝことは、涙も之れを拭ひ去り得ず、
天は怒りの其日には、之れを罰せで止まざるなり、
されども—これや遂げしこと。たとひ其罪如何なるも、
彼れの爲めに、其懷劍は用ゐられ、血は流されしは彼れ
知れり。
彼れは此くて自由を得たるも、彼れの爲めに彼女は、

地上凡ての物のみならず、天上凡ての物以上、皆盡く失
ひぬ。
彼れ黑き眼の奴隸の方を振り向けば、
彼れの目なざしの其下に、彼女はうなだれつ、
今や人格變り、謙遜り、いとしとやかに、かよわき者と
なりたれど、
頰の色は屢々變りて、
濃き青ざめし影となり—
凡て赤き其色は、死にし人より染めなせし、げにものす
ごき血の一點。
今や餘りに遲けれど—彼れは其手を取りしかば—其手は
ふるひおのゝきぬ—

此くも愛には溫和きも、惡みの感じも亦强し。
彼れ其手を握りしむれば—其手はふるひ—
彼れの手も、亦其確乎さ失ひぬ、又た其聲も其調子も。
『グルナレー』—されど答へず—『愛するグルナレー』
彼女其眼を擧げぬ—此内彼女の惟一の答はあり—
彼女直に彼れに抱きつき、彼れの腕に抱かれ了りぬ。
若し彼れにして彼女を、己が胸より、突き退ぞけしなら
んには、
彼れの心は人間の、心以外の人たるべきも、
其善惡は問はずとも—彼女に、去れよと命ぜざりしなり。
恐くは、たゞ胸中、何等か前知の其爲めに、
彼れの最後の一德は、其他のものと、此くて結合したり

けん。
且つ此くも、此上もなき美形より、願はれたりし接吻は、
メドラと雖必ず許るすことならん。
これぞ之れ、『纖弱こと』が『貞操』より、盜みし所の、始めたり、
又た終りたる接吻にて—
其唇には、『愛』は惜しげなくも、其呼吸を費やしつ、
彼れ其翼の羽ばたきもて、いと爽快に扇ぎなば、
其唇の、斷續なせる嘆息には、げに馥郁たる香氣を放つ
なり。

十八

夕の光模糊たる頃、彼等その、淋しき島に着きにけり。

其島山は彼等には、微笑めるが如く思はれて、
港の中は歡びて、迎ふる聲のにぎはしく、
烽火は、常の場所の周圍にかゞやき、
短艇は曲れる灣を行きかひつ、
海豚の數々、波をくゞりて遊び戯れ、
海鳥の、嗄れし、鋭き、不調子の、叫びの聲は
調子あらざる嘴もて、歡迎の意を述ぶるに似たり。
窓より洩るゝ各々の、燈火の下には、
友等の燈火とゝのふる、姿を彼等の想像は、心の中に描
きたり。
あゝ、何物か、太洋の、苦しき波路歸り來る、希望の樂
しき面色程、

家庭に於ける喜悦を、神聖となすものやある。

十九

烽火高くかゞやけり、室より光は洩るゝなり。
是等の光の其内に、コンラードは、メドラの住ふ樓閣は、
何れなりやと、心の内にさがせども、
更に甲斐なし――こは不思議――
凡ての者も氣付きたり、多くの光の其内に、メドラの室
のみ暗かりき。
こは不思議なり――以前には、其燈火はかゞやきて、必ず
歸りを迎へにき。
さればこは、消えしものには非ずして、或は物の蔽へる

ならめ。

彼れ上陸爲さんとて、第一おろす短艇に乘り。

其漕ぐ櫂を打ながめ、速かならぬをかこちつゝ、

かなたの高きに矢の如く、其身を運び行かん爲め、鷹にも優る翼もが。

舟こぎはてゝ、櫂の手止むるや、

彼れ待ちもせず—見向きもなさず—直に海に跳び込みて、

波を蹴てゝ渚に上り、

見なれし道を登りたり。

彼れ其家の戸に達し—暫足を止めしも—

内より聲の洩るゝなく、四邊は眞の闇の夜

彼れ戸をたゝけり、音高く—

家の内には足音もせず。答もなく、彼れの歸りを聽き付けし、樣子は更になかりけり。

再び彼れは戸をたゝけり—されど甚だ力なく—

これ其震へる彼れの手は、沈める心の要求に、應ずることを拒めばなり。

戸は開きたり—こは善く知れる顏なれど、

相擁かんと思ひつめし、其形には非ざりき。

其唇は默して言はず—

彼れ躊躇しつゝ、再びまでも、問ひの言葉を企てしも、

口より出でず。

彼れ燭を手に攫めり—其火は凡てを答ふべし—

されども手より落ちて火は消えたり。

彼れは再びともすも待たず、
直にあたりをさがしつゝ、光もがなともとめしが、
うす暗がりの廊下を透して、
他の光は床の上に影さしぬ。
彼れ其室に入り見れば、
其目は凡て、彼れの心の信ぜざるものを見ぬ—されども
之れ豫め期せし所。

二十

彼れふり向かず—言葉も出ださず—沈みもなさず—たゞ
つく〳〵と見まもりつ、
さきに弱りし、憂れはしき身を取り直ほせり。

彼れは見つめぬ—吾等も亦、苦痛を厭はず、長く之れを
見つむるなり、
見つめたりとも益なきは、知れど自ら然りとせず。
生ける時には彼の女、げにも靜かに美しく、
死も亦やさしき面もちして、同じく其處に凋ほみけり。
僅かに感覺尚ほあるも、寢りよそへる其の如く、
今はのきわに握りたる手をばやさしく開かせて、
持たせそへたる冷たき花を、彼女の尚ほも冷たき手は持
ちて、
悲しみ歎くは尚ほ早しと、殆と嘲る如きなり。
長き黑き其睫毛は、雪なす眼瞼に緣どり蔽ひ—
思想は凡て、下に潛めるものに對して退きぬ—

あゝ、死は力を最も眼に擴め、
靈魂を光の玉座より投げ降し、
碧の球は、此の長き、最後の日蝕中に沈み去れり。
されど其口唇の周圍には、尙ほ愛嬌を殘せども、
今や微笑むことをたしなみて、
たゞ暫時―寢りを願ふ如きなり。
されども白き蔽ひ衣、さばけて散れる其髮は、
長く美しとは云へども―全く生命あらざるなり。
過ぐる頃まで、この髮は夏の凉風弄び、
益もあらざる環につがね、結び上ぐるを遁れしもの、
今は是等も―色蒼ざめし其頰も、皆な死を載するものと
なり―

彼女何物にてもあらなくに―何故彼れこゝに止まれる。

二十一

彼れ何事も問ふことなく―凡ての事は今や皆な、
かの動かざる、大理石なす容貌の、一見直に答へたり。
是れにて足れり―彼女は死せるなり―何もの果して、如
何なる感もて之れに對せん。
青年時代の愛情たり―幸福なりし歲月の希望たり、
かよわき願ひ、やさしき恐れの源たり、
生とし活ける人間中、惡み能はぬたゞ一人の其人は、
此くて奪ひ去られたり―彼れの運命、或は之に値せんも、
其感慨や些少に非ず―

善人は、平和の爲めに、罪人の翺翔り得ざる、其天國を
求むれど、
尊大放縱―喜ぶ所をたゞ下界にのみ限り、
而も又た、此世界は不幸に充てりとなしたる者は、
たゞ此一に、其一切を失ふなり―こはこれ些細のものな
らん―
されど己れが喜びと、爲せる凡てと別るゝに、誰かは之
れに堪え得べき。
ストア者流の多くの目と、いと嚴格の容儀とは、
悲哀すでに悟るべき、餘地なき心に假面を被せ、
なやみ凋む數多の思想は、消え失せしには非ずして、
最も多く、假面をかぶる其人に、最も相應はぬ微笑の、

中に隱れてあるものぞ。

二十二

最も深く感ずる者は
苦しき胸のもつれをば、善く十分に、言ひ表はすを得ざ
るなり。
千百の感慨は、一つに終らんとして始まりて、
凡てのものより避難所を、得んとし之れを求むれど、何
れに於ても之れを得ず。
如何なる言葉も、心の秘密を表はす能はず、
これ眞理は、悲哀に凡ての雄辯を、與ふることを拒めば
なり。

コンラードの傷められたる精神には、「疲れ」は迫り壓し來り、
昏睡は殆ど之れを寢せ付けて、
今は全く弱りはて―荒らき彼れの其目には
母のやさしさ入り込みて、小兒の泣くにも譬ふべし。
實にこれ、其頭腦の弱き所、
苦痛を救ふこともなく、此くはこれを自白せり。
彼れの涙を流すをば、誰しも見たることなけん、
若しそを見たるものありとも、歎きの涙の瀧つ瀨は彼れ
に用なし、
又た何時までも時ながく、流れ出でにしことはなし、
彼れ頼みなく―望みなく―心を傷め―其極や、涙に離別
し涸かしぬ。

日は進めどもコンラードの日は暗し、
夜は來れどもコンラードより去ることなし、
「悲しみ」の眼より見る時は、心の雲の夫れの如き暗きは他
にあらざるなり―
げにこれ盲目の中の盲目にて―
見ること能はず―敢て見ず―
たゞ〳〵黑き影の方に向き―又た導きを受けもせず。

二十三

彼れの心はやさしき方のものなれど―惡しき方に曲りし
なり。
餘りに若かく裏切られ、餘りに長く欺かれ、

凡ての清き感情は―洞窟の内に、滴るつゆの、夫れの如くに堅まりぬ。

土地の試錬を經來りて、或は清きを失ふも、
下に沈みて、堅まりて、遂には岩と化するなり、
されど暴風は磨り耗らし、雷霆之れを裂き破らん。
若し彼れの心此かりせば、激動之れを碎きしなり。
荒らき額の岩の下に、一つの花は咲き笑みぬ、
其陰たとひ暗くとも―此時までは其を守り―又た其を救ひたりしなり。
然るに雷霆墮ち擊ちて、
「花崗石」の其強さも、「小百合」の花の成長も、併せて之れを殘害し、

やさしき花も、其事語らん葉をも殘さず、
凋みちゞみて散り落ちつ、
又た其冷たき保護者たる、岩も黑く燒け焦げて、
磽确不毛の地の上に、たゞ片々と碎け散れり。

二十四

朝となりぬ―誰しも、淋しく獨り居る、彼れを訪ねる得るはなし、
たゞアンセルモ彼れ一人、彼れの住居の塔を見舞へり。
されどコンラードは其處に居ず、又た濱邊にも見へもせず。
こゝに夜となるの前、警報を傳へて島中を探がしたり。

次の朝も―又た他の者等は探がしたり。
皆々彼れの名を叫びて、其反響の微となるまで叫びたり。
山に、岩屋に、洞窟に、又たは谷間を探がせども、其甲斐更になかりけり。
彼等濱邊を探し行き、小舟の切れし鎖を見出だし、こゝに望を快復し―海上くまなく探がしたり。
されども凡て其甲斐なく―月は出で月は入れども、コンラードは歸り來らず―其日此方歸り來ず。
何處にか、彼れの悲しみ生けるぞも、何處にか彼れの絶望死せるぞも、
彼れの手下の者共は、他には悲しむものもなき、彼れを久しく悲しみぬ。

彼れの妻には、美しき、紀念の墓を立てしかど、
彼れの爲めには、記しの石も建てざりき―
彼れの生死は、知るもの絶えてあらざれど、其行ひし行蹟は知らざる者ぞなかりける。
彼れたゞ一つの德義に繫ぐに、千の罪惡を以つてして、
『海賊』の名を末代までも殘したり。

《をはり》

註釋

註釋

○トーマス、ムーアに捧呈の辭の前なる

"I suoi pensieri in lui dormir non pomo"——

これはタッソの『救はれしエルサレム』なる詩中の句にして、『彼れの思想は彼れの心の内に息み能はず』と云ふ、イタリア語なり。

第一齣

○第一齣の始めの外國語

"——Nessum maggior dolore,
Che ricordarsi del tempo felice
Nella miseria,——"

はダンテの『神曲』『地獄』篇第五齣、百二十一、百二十二、百二十三行の句にして『不幸中に、幸福なりし時のことを思ひ出たす程、大なる苦痛あるなし』と云ふ意味なり。之れリミニのフランチェスカの物語の條なり。

○海賊島（一ノ一）ガルト（Galt）の説に由ればバイロンのグレシアに在りし時、アイガイ多島海中、海賊の據る所と云へる二箇の島あり、スタンパリア（=Stampalia 昔のアスチパライ=Astypalai）及ひコロンナ岬（=Colonna 古のスニオン=Sunion）と、ゼア島（=Zea 古のケオース=Keōs）との間の細長き島これなり。全躰の記事に據りて考ふに、バイロンの海賊根據地はコロンナ沖の一島なるが如し、此島は岩石勝なりと。然りと雖も、此説の當否は不明なり。たゞ多島海中の一島にして大陸とは短少時間に往復し得る所なり。

○ヘーラクレース（一ノ十四）—古代グレシアの半神半人にして、骨格筋肉逞ましき強力の英雄なり。

○アリオスト—オリンピア（一ノ十四）ルートヰコ、アリオスト（Ludovico Ariosto）は一千四百七十四年北イタリアのレッジオ（Reggio）に生れ、一千五百三十三年フェラヽに死す、有名なるイタリアの詩人なり。『オルランド、フュリオ

ーソ』（Orlando Furioso）の著あり。オリンピアは、此詩中の女主人公なり。

○信に背きし英雄—アリアドネーの島（一ノ十四）信に背きし英雄とはグレシア古代の英雄テーセウスのこと。昔クレタ島に迷路殿あり、中に牛頭人身の怪物住す、ケンタウロスと云ふ此怪物の妹にアリアドネーと云ふ美人あり、テーセウスに戀慕し、助けて怪物を殺さしめ、夫婦となり、移つてナキソス島（Naxos 今のヂア Dia）に住せしが、後テーセウス此女を棄て去れり。アリアドネーの島とはナキソス島。

第二齣

○第二齣の始めの外國語

"Conosceste i dubiosi desiri?"

は、同じくダンテの『神曲』『地獄』篇第五齣、百二十行の句にして、『何に由つて、又た如何にして、汝は其不明なる情（愛）を知りしか』と云ふことなり。同じくフランチェスカの條。

○コローンの灣 Koron（二ノ一）コローン灣とは果して何れなりや十分に明ならず、若しバイロンにして、現今のコローン灣を云へるならんか。此地はトルコに服從せざりし地にして、此地にトルコ大守の館を置き、一種の策源地となせしは、聊か其宜しきを得ずと云ふ註釋者あり。

○熾え立つ勇氣をグレシア人に試み養へ（二ノ一）トルコ人はグレシア人を壓伏し、其の國を滅ぼして自國の領土に之れを加へしなり。されどもグレシア人は未だ、全くトルコに服せず、往々不穩の擧動あるより、トルコ人はグレシア人を惡み卑しみ、殘酷の待遇を之れに加へ、人道に離れたることを行ふ事珍らしからず、グレシア人は、常にトルコ人の脅迫を受くるなり。「燃え立つ勇氣」云々は即ち此の殘忍なる脅迫なり。

○ツルベンド帽（二ノ一）印度、西部アシア、アフリカ、トルコ等に行はるゝ、布をもて幾重にも頭を卷きたる帽子樣のものなり。

○苟も頭纏はんと欲するもの（二ノ一）ツルベンド帽たらんと欲するものはと云ふ義にして、トルコ人、マホメット人たらんとするものはと云ふと同一。

○眞面目なる樹の實の汁（二ノ一）「コヒー」のこと。

○禁制の飲料（二ノ一）―マホメット教は酒を禁ず。―これ酒のこと。

○アルマの妓女（二ノ二）アルマとは學者の義、エジプトの高等藝妓

○デルヰッシュ（Dervish-Dervice）（二ノ、三）マホメット教中の一種の宗派に屬する僧の階級のものにして、貧困、精進主義の嚴重なる持戒のもの。

○スカラノヴ（Scaranova 又た Scaramovo）（二ノ四）小アジアにあり、アイガイ海の分肢にして、サモス島に由つて蔽はるゝ灣なり。

○スキオス（Scios）（二ノ四）昔のヒオス（Chios）なり、トルコのサキ、アダシ（Saki Adashi）なり、アイガイ海の一島。小アシアの西にあり。古より酒と果實の產地。叙事詩人の集まりし地、ホメーロスの生地なりとも云ふ。

○吾れは豫言者の憤怒を被り、メッカの堂に巡禮すること叶はざらん（二ノ四）預言者とはマホメットのこと、メッカはマホメット教の聖地、該教徒はこゝに巡禮するを以つて信神のことゝなす。

○アフリットの妖怪（二ノ四）アフリット（Afrit）の妖怪とはトルコ人の恐るゝ妖怪なり。

○ザタナイ Zatanai(二ノ四)サタンのこと、惡魔なり、敵なり。

○婦人寮(二ノ四)トルコは多妻國。上流者は多くの妻妾を有し、之れを一寮に置く。ハレム Harem(或はハラム Haram)と云ひ、又セライ Serai と云ふ。

○グルナレー(二ノ六)ザィドの愛妾。コンラートに戀慕せしもの。原語の意味は「石榴の花」なり。

○アラ、イル、アラ Alla il Alla(二ノ六)マホメット宗徒の用ゆる皷舞の言葉にして、『神(Alla)の外に神なし』の義なり。

○其諧謔は所刑臺をとよめかせ(二ノ十三)トーマス、モーアの死刑に處せらるゝの時、及ひ皇后アン、ブリンが處刑臺上にて、斷頭者に向つて『吾頭は斷頭者を煩はすには、餘りに小し』と云へるが如き、又た佛國革命の時、死刑に處せらるゝ者は、何か警句を殘す例となれるが如き死を笑ひて滑稽の觀あらしめしこと等なり。

○三頭政治家のやさしき一人(二ノ十五)アントニウスのこと、クレオパトラの色に溺れし故此く云ふ。

第三齣

○第三齣の始めの外國語

"Come vedi-ancor non m' abbandona"

は同じくダンテの百五行の句にして『汝の見る如く、彼れは尚ほ、妾を見棄てざり』と云ふことなり。

○第三齣の初めの一節全體は、本編にあまり關係なきことなり(實は此部分は『ミネルヴの呪』なる詩(印刷したれども發行せざりし)の初めの部分を成したるものなるが、バイロン再びこゝに之れを用ゐたるなり、バイロンが念々グレシアを忘れ能はざる趣見るべきなり。

○モレア Morea(三ノ一)ペロポンネーソス半島。

○北の國(三ノ一)英國其他北方歐洲を云ふ。

○アイギナ Aigina(三ノ一)河神アソポス Asopos の女の名なり。大神ゼウス Zeus 之れを愛し、盜みてアイガイ海のサロニック灣の一島に置く、此島之れよりアイギナ島の名ありと云ふ。

○イドラ Idra (Hydra) (三ノ一)グレシア多島海の島。ペロポンネーソスより四マイルの處にあり。

○歡喜の神(三ノ一)太陽神のこと。

○降伏せざりしサラミスの灣(三ノ一)昔ペルシアの大艦隊サラミスを征めしも、降伏せず、ペルシア艦隊を全滅したる所。

○デルフォイ(三ノ一)太陽神の稱あるアポローンの宮のある所。神託を以つて有名なり。

○最も賢明なる人(三ノ一)ソークラテースのこと。デルフォイの神託は、ソークラテースを以て世上最も賢明の人と宣せり。而してソークラテースの死刑は夕刻にして、太陽未だ西山に沒せざりし時、泰然として毒杯を仰ぎたるなり。

○フォイボス(三ノ一)太陽神のこと。

○キタイローン Kithairōn (三ノ一)メガリス Megaris 及びアッチカ Attika よりボイオーチア Boiōthia を分つ山脈。古傳說に有名にして、ゼウス及びヂオニュソス神の聖地。現今ヰラニヤ Elania と謂ふ。

○ヒメットス Hymettos (三ノ一)アッチカに於る山の昔の名稱にして、アテーナイ Athēnai 市の南東にあり、トレロ、ヴーニ Trelo vouni は現今の名。

○ケーフィソス Kēphisos (三ノ一)アッチカの河にして、アテーナイの平原を過ぎてサロニック灣に流注す。

○テーセウス(三ノ一)第一齣十四の『信に背きし英雄』の註を見よ。

○キュクラデス群島 Kyklades (Cyclades) (三ノ一)環を意味す。アイガイ海の島嶼。古はデーロス Dēlos 島の周圍に環を爲せりと信したるより此名あり。

○不信者(三ノ五)原語、こゝに Giaor と云ふ、トルコ、及びペルシヤ等にて Gawr と云ひ、トルコ人等が、マホメット教に對する不信者を稱する惡名なり。

○マイナ人(三ノ八)マイナはコローン灣の東部にある地なり。トルコ人がグレシアを征伏せし時、此地はトルコに服せざりしなり。人民美麗にして獨立心に富み、質朴眞實の人種なり。

○今まはのきわに握りたる手をばやさしく開かせて、持たせ添へたる冷たき花(三ノ二十)トルコ、小アシア、アフリカ等には、死人の上に花をふり撒き、又た若き死者には花球を手に持たす習慣あり。

明治三十七年十二月廿六日印刷
明治三十八年一月二日發行

海賊
正價金六十五錢

著譯者　東京市芝區金杉濱町三十五番地　木村鷹太郎

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　副島優

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　天野耕一

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

著作權所有

發行所　東京市神田區錦町一丁目十番地　尚友館書店
（電話本局二一八二番）

●木村鷹太郎君著

第三版

讀書百感　鳴潮餘沫

●正價四拾錢●郵稅六錢

本書は著者の讀書百感なり、花あり、鳥あり、偉男子あり、美人あり、國家あり、道義あり、政論あり、哲理あり、宗教あり、詩歌あり、「アナクレオン快樂歌」「バイロンの女性及び愛戀觀」「海賊及びサタン主義」等の大論文も本書中に收む

●木村鷹太郎君譯

バイロン著

艶美の悲劇詩

パリシナ

●洋裝假綴美本全一册

●正價廿錢●郵稅二錢

パリシナはスエテ侯の若き奥方本篇の主人公艶なる美人の名なり、其の義子に美にして勇壯なるヒューコーなるものあり、パリシナこれと通じて夫たり父たる侯爵これを知り、自ら法官の位に座して兩人を死刑に處す、其人物、其光景、艶美に兼るに勇壯を以つてすと雖も倫理の關係や實に悲劇の極にあり、これバイロンの名作にして詞章の華麗なる叙景叙事の眼見るが如き、又全篇の語調の音樂的なる西洋各國の文學者音樂者の賞嘆止まざる眞に故あり、本書は原詩と共に、(バイロン)に精通せる木村鷹太郎君の精密なる散文詩に譯したるものと對照したるものなるを以つて英語及び英文學を研究せんとするものも日本文に依つて英文學及びバイロンを研究せんとするのも何れも共に必讀の書たり。

プリュータック著

英雄傳

森晋太郎君譯

●初卷發行以來非常の好評を博す●本編廿五冊●附錄一冊●逐次發行

●毎卷參考畫寫眞版數葉挿入●新裝美本

●正價各冊五錢郵税各四錢

本書が泰西諸國に於て古來の大人物を感激興起せしめたるは世界の一大現象也實に種々の英雄は躍然本書の紙面に活動し或は剛壯或は溫和或は美或は善、智、慮、愛、敵等凡そ人間性格の大なるもの殆んど茲に存す、されば歐洲諸國皆其國語に飜譯して人物養成に資せざるなし啻に之に止まらず又歐洲の文物制度研究の最重要なる參考書として寔に歐洲古典中、拔群の位置を占むる者也今や學術は其源泉を極め又た世界的英雄の輩出を望む我大日本豈に之を國民文學として有せざるべけんや。青年諸氏の讀物たるは勿論學者の參考、經綸家の重寶として吾人は熱心に本書を薦むるもの也。

本書各卷總目錄は次頁を見よ

プリュータック英雄傳各卷總目錄

▲卷一　シーセアスとロミュラス(Theseus & Romulus)　▲卷二　リカーガスとニューマ(Lycurgus & Numa)　▲卷三　ソーロンとポブリコラ(Solon & Poplicola)　▲卷四　シーミストクリーズとカミッラス(Themistocles & Camillus)　▲卷五　ペリクリーズとフェービアス(Pericles & Fabius)　▲卷六　アルシバイアデーズとコリオレーナス(Alcibiades & Coriolanus)　▲卷七　チモーリオンとイミリアス(Timoleon & Æmilius)　▲卷八　ペロピダスとマーセラス(Pelopidas & Marcellus)　▲卷九　アリスタイデースと前ケートー(Aristides & Cato the Cemor)　▲卷十　フイロピーメンとフレミニナス(Philopœmen & Flominius)　▲卷十一　パーラスとメーリアス(Pyrrhus & Marius)　▲卷十二　ライサンダーとサラ(Lysander & Sallaflus)　▲卷十四　ニシアスとクラッサス(Nicias & Crassus)　▲卷十五　サートーリアスとニューメニーズ(Sertorius & Eumenes)　▲卷十六　アジエシレーアスとポンペ(Agesilaus & Pompey)　▲卷十七　アレキサンダーとシーザー(Alexander & Caesar)　▲卷十八　フオーシオンと後ケートー(Phocion & Cato the Younger)　▲卷十九　エージスとクリメニーズ(Agis & Cleomenes)　▲卷二十　タイビーリアス、グラッカスとケーアス、グラッカス(Tiberius Graechus & Caius Gracchus)　▲卷二十一　デモステニーズとシセロ(Demosthenes& Cicero)　▲卷二十二　デミーツリアスとアントニー(Demetrius & Antony)　▲卷二十三　ダイオンとブルータス(Dion & Brutus)　▲卷二十四　アータキザークシーズとアレータス(Artaxerxes & Aratus)　▲卷二十五　ガルバとオーソー(Galba & Otho)　▲附錄　原著者プリュータークの小傳

以上

●心理學大家　竹内楠三先生著

新刊

精神の病理

菊版洋裝美本全一册
定價五十錢郵税八錢

心理學、社會學、哲學、法律　倫理、教育、宗教、文學、美術等の研究に志す人士は勿論凡そ社會人生の問題を解せんとし論ぜんとする人は精神の病理に通ぜざるべからず然るに我國には治療に關する二三の書あるのみにて未だ如上の讀者の爲めに精神病理を說きたるもの一も之あらず本書は即ち上述の必要に應ぜんが爲めに心理學專攻の大家竹内先生が斯學に關する獨佛英の諸書を參考し專らライプチッヒ大學のステーリング氏の近著一般精神病學講義に基て書かれたるものにて一々事實を擧て精神の凡ての病的現象を細かに記述し又諸家の學說を列擧比較して斯る現象の起る所以を明にす事實正確議論嚴密文章明快一讀種々の精神病的現象を知ると同時に又其の學說に通ずることを得べし